

立山町埋蔵文化財分布調査報告IV

1988年度

付：稚児塚古墳測量調査成果の考察
東大寺領大荆荘域分布調査成果の考察

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1989年3月

立山町埋蔵文化財分布調査報告IV

1988年度

付：稚児塚古墳測量調査成果の考察
東大寺領大荆荘域分布調査成果の考察

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1989年3月

序

靈峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の生活の場として、また立山禪定に代表される信仰の場として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこうとしています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、真の地域社会の発展へつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され、文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

立山町教育委員会

教育長 坂井市郎

例　　言

- 1 本書は、立山町教育委員会が^{たてやまちょう}国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第4年度（1988年度）の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成しこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力しておこなった。
- 4 本文は、宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）、森秀典、田島富恵美（富山大学大学院人文科学研究生）、清水孝之、長谷川健一、山本慎子（富山大学人文学部考古学専攻学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。
- 5 注は章末に一括し、通し番号を付して示した。本文のルビ数字は、この注番号である。
- 6 遺物番号は図版ごとに通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し、実測図と写真の番号を統一している。
- 7 本書には、分布調査以前に採集・発掘された未報告の資料を出来る限り収録した。その区別は本文中に示し、遺物の散布状態として示す数値からは除いている。
- 8 本書には、分布調査採集品についての分析に加えて、稚児塚古墳測量調査成果の考察として第3章北陸における大型円墳の規模とその意義、及び東大寺領大荆荘域分布調査成果の考察として第4章東大寺領大荆荘をめぐって、をあわせ収録した。
- 9 編集は秋山進午、宇野隆夫と森秀典が協力しておこなった。
- 10 本書の作成にあたっては、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良栄氏、小島俊彰氏、田嶋明人氏をはじめとする方々から多くの貴重な御教示をうけた。また石器の石材は、富山大学教養部教授藤井昭二氏に鑑定していただいた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 立山町の地勢と自然環境	2
4 1988年度調査地区の地勢と地区割	6
第2章 分布調査の成果	7
1 遺跡と採集遺物	7
(1) 泉藏留遺跡	7
(2) 寺田川嶋遺跡	7
(3) 寺田正沼遺跡	8
(4) 泉下役遺跡	8
(5) 浦田柳町遺跡	8
(6) 大明神經塚	9
(7) 浦田遺跡	9
(8) 浦田前田遺跡	10
(9) 雅見塚古墳	11
(10) 若林階子田遺跡	12
(11) 若林大丸遺跡	13
(12) 寺田三十苅遺跡	13
(13) 寺田越前遺跡	14
(14) 若林経塚	14
(15) 若宮A遺跡	15
(16) 若宮B遺跡	15
(17) 辻遺跡	17
(18) 辻宮下遺跡	18
(19) 辻向田遺跡	19
(20) 辻坂の上遺跡	20
(21) 高原橋場遺跡	20
(22) 高原早稲田遺跡	21
(23) 高原諏訪遺跡	21
(24) 高原念仏塚遺跡	22
(25) 高原下大門遺跡	23
(26) 上女川新遺跡	24
(27) 下女川新遺跡	24
(28) 野町遺跡	25
(29) 野口新龜沢遺跡	25
(30) 大祖里神社前遺跡	26
2 遺物の散布状態	27
(1) 縄文時代遺物の散布状態	27
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態	28
(3) 古代遺物の散布状態	28
(4) 中世遺物の散布状態	34
(5) 近世遺物の散布状態	34
(6) 遺物の散布について	34
第3章 北陸における大型円墳の規模とその意義	36
第4章 東大寺領大荆荘をめぐって	49
第5章 おわりに	60

図版目次

関連頁

図版 1	IV地区航空写真(1)	1988年撮影.....	11・12
図版 2	IV地区航空写真(2)	1969年撮影.....	11・12
図版 3	稚児塚古墳航空写真	「富山県史」から.....	11・12
図版 4	稚児塚古墳墳丘写真(1)	宇野撮影.....	11・12
図版 5	稚児塚古墳墳丘写真(2)	宇野撮影.....	11・12
図版 6	稚児塚古墳墳丘測量図	田島製図.....	11・12
図版 7	遺物実測図(1)	清水製図.....	7～17
図版 8	遺物実測図(2)	山本製図.....	17～21
図版 9	遺物実測図(3)	長谷川製図.....	21～24
図版10	遺物実測図(4)	宇野製図.....	24～27
図版11	遺物写真(1)	森・清水撮影.....	7～17
図版12	遺物写真(2)	森・山本撮影.....	17～21
図版13	遺物写真(3)	森・長谷川撮影.....	21～24
図版14	遺物写真(4)	森・長谷川撮影.....	24～27
図版15	IV地区的遺跡と遺物採集地点	宇野・森作成.....	7～35

插図目次

第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化	『立山町史』から	2
第2図 立山町西部の地勢	宇野・森作成	3
第3図 IV地区図	宇野作成	4
第4図 IV地区的地区割	宇野作成	5
第5図 調査参加者	森撮影	6
第6図 IV地区縄文時代遺物の散布状態	宇野・清水作成	29
第7図 IV地区弥生・古墳時代遺物の散布状態	宇野・清水作成	30
第8図 IV地区古代遺物の散布状態	宇野・清水作成	31
第9図 IV地区中世遺物の散布状態	宇野・清水作成	32
第10図 IV地区近世遺物の散布状態	宇野・清水作成	33
第11図 北陸における円墳の規模と外部施設	田島作成	40
第12図 芳賀・越前・加賀の円墳の規模と外部施設	田島作成	42
第13図 能登・越中の円墳の規模と外部施設	田島作成	43
第14図 越中国新川郡大藪開田地図	宇野作成	50
第15図 越中国新川郡大荆村磐田井野地図	宇野作成	51
第16図 大荆荘比定地付近の字名	宇野作成	52
第17図 古代遺物の散布状態と東大寺領大荆荘比定地	宇野作成	54
第18図 大荆荘比定地付近の古代遺跡	宇野作成	55

表目次

第1表 北陸古墳時代の円墳一覧	田島作成	37
第2表 各遺跡の時代別遺物散布量	宇野作成	53

第1章 はじめに

1 調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器（先土器）・繩文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連續と人びとの営みが続いている。

従って遺跡も多数存在しており、1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては63箇所の遺跡が登録されている。そして、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2 調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことになった。

1985年（昭和60年）3月27日に、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査団を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することになった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、5ヶ月計画とすること、年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表、及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定された。

また調査の実施にあたっては、町域を8地区に区分し、I～V地区を当面の対象地域として初年度は第I地区、第2年度は第II地区、第3年度は第III地区、第4年度の本年は第IV地区について調査をおこなった（第2図）。

現地調査は、1988年4月4日から同4月16日までの間、計13日間、延130人の参加を得て実施した。

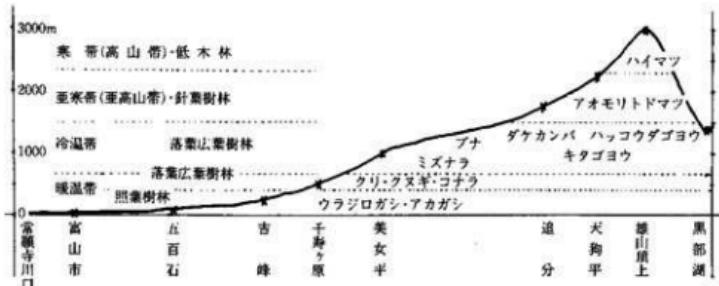
立山町埋蔵文化財分布調査団

団長 坂井 市郎 立山町教育委員会教育長
 質問 岡崎 那一 元立山町史編纂主任
 安田 良栄 立山町文化財保護審議委員
 調査団 久山 進午 富山大学人文学部教授（調査主任）
 宇野 陸大 富山大学人文学部助教授（調査副主任）
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事
 調査補助員 田島富慈美、小田木治太郎、山谷 典子（以上 富山大学大学院人文科学研究科学生）
 押川 恵子、春日 真実、境 洋子、品川 水美、高村 幸江、田中 道子、安 英樹、
 長谷川健一、金木和香子、桑名 秀徳、清水 孝之、山本 慎子
 （以上 富山大学人文学部考古学研究室学生）
 事務局 松井 哲男 立山町教育委員会社会教育課長
 志鷹 敏彦 立山町教育委員会社会教育課庶務係長
 石原多喜子 立山町教育委員会社会教育課主任
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

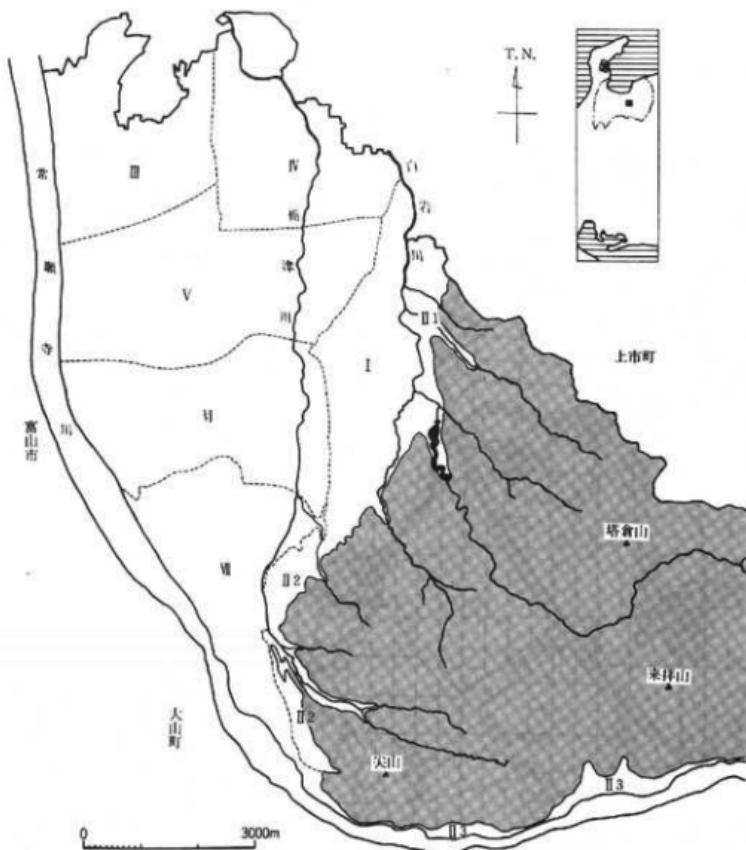
3 立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く伸びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308km²を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された三角洲（アルカ）地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に伸び、扇頂



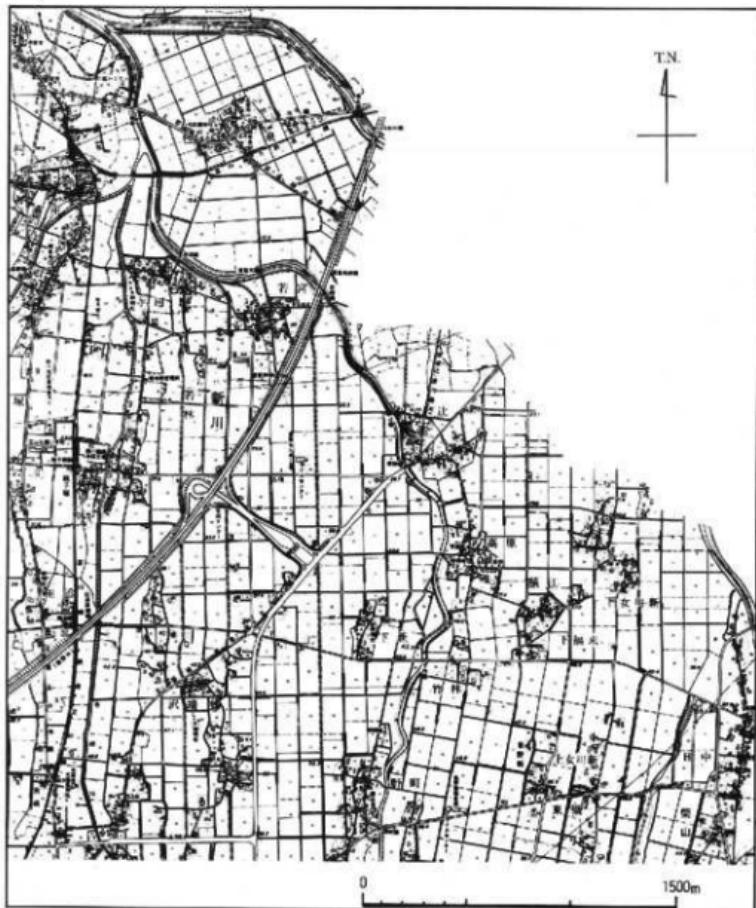
第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化（『立山町史』から）



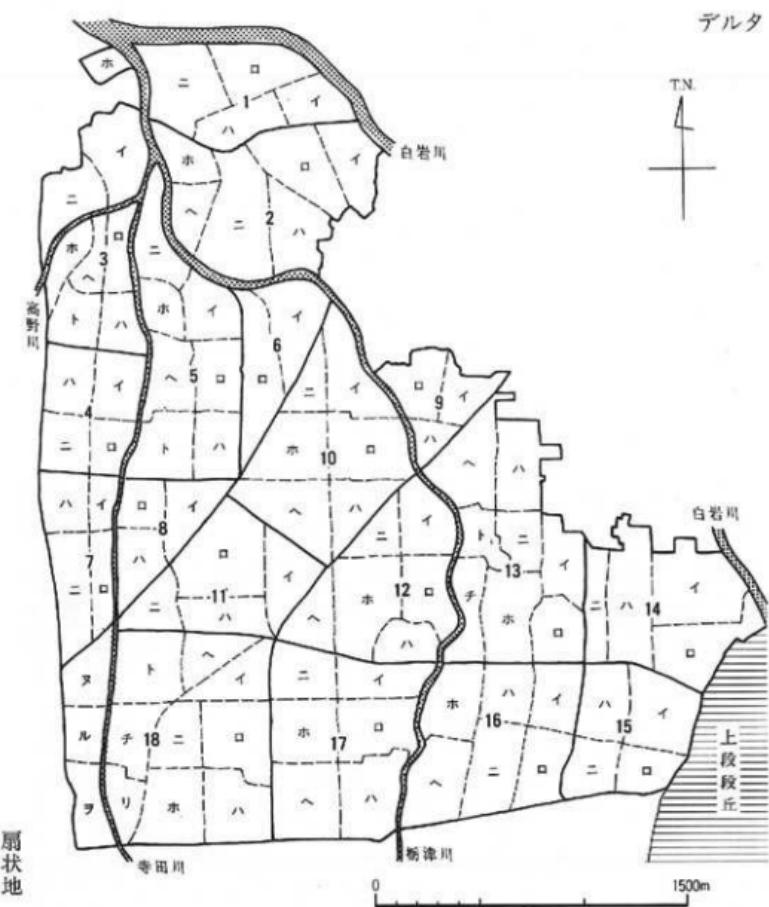
第2図 立山町西部の地勢(IV地区が1988年度調査区、縮尺1/100,000)

部の岩崎寺から上流の千寿ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる(第2図)。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3,000mの山脈へと続く。これが立山連峰であり、ここには氷河地形の圓谷(カール)や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が成育し、それに伴う複雑な動物相も存在する(第1図)。



第3図 IV地区図（縮尺 1/27,000）



第4図 IV地区の地区割 (縮尺 1/27,000)

4 1988年度調査地区の地勢と地区割

今回の調査地区は、立山町の東北部、新川地区東部及び高野地区北部である。

この地区的地形は、柄津川と白岩川が形成した扇状地の扇央近くから扇端部に至る部分と、デルタの湧水地帯とからなっている。また微地形についてみると、調査区西部は寺田川などの小河川によって開析された小支谷が多く、北部はデルタ地形となっている。

従来この地区で知られていた遺跡は、高原（縄文）・浦田（弥生）・辻（古墳）の各時代の集落跡と稚兒塚古墳など少数にすぎなかったが、近年の開発に伴う発掘調査が急増し、またそれにより各遺跡の内容が徐々に明らかになってくるにつれて、この地区が弥生時代以降における新川郡の開発拠点の一つであった可能性が高まってきた。しかしながら、確認された遺跡の数は未だ少なく、は場整備が早くから進行したこともある、その破壊・消滅が心配されていた。

現在は、調査地区的ほとんど全てが水田等の耕作地、又は宅地となっている。また当地区は高速道路などによる交通の便が良く、近年特に開発行為の多い地区である。このため、早急な分布調査が望まれていた。

調査は、全体を地形・水路・道路などによって18地区に大別し、さらに97の小地区に細別して実施した。

(森秀典)



第5図 調査参加者（稚兒塚古墳にて）

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) 泉藏留遺跡 (図版15の1, 注①) 立山町泉字藏留・乗田

遺跡は、白岩川と橋津川の合流点の扇状地微高地上に立地し、県道柿沢・泉線の東北側沿いに所在する。標高は約13mを測り、規模は東西約200m、南北約200mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。

採集した遺物は、弥生～古墳時代の土器5片、古代の須恵器杯B蓋11片・杯B身2片・杯4片・壺3片・甕4片(計24片)、中世の土師器皿5片・珠洲甕6片・すり鉢1片(計12片)、近世の越中瀬戸碗3片・皿5片・壺2片・伊万里系皿1片(計11片)、総計52片である。これらのうち2点を図示した(図版7の4・5)。

図版7の4は鉢状陶製品であり、窓の用具として使用されたものであろう。復原口径は約22cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は緻密で少量の黒色粒を含む。近世のものであろう。

5は越中瀬戸皿の底部破片である。高台は削り出しており、断面は三角形をなす。色調は赤褐色を呈し、内面の上部に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密である。内面と外面の上部に模様回転施す。模様回転方向は右廻りである。

以上、本遺跡の採集遺物は弥生時代から近世・近代に至るものであり、扇状地扇端部の利用が盛んであったことを示している。なお遺跡は現在水田として利用されている。

本遺跡は(2)～(4)・(12)・(13)の遺跡とあわせて、東大寺領大荆荘比定地にあたるため、第4章で別に考察を加える。

(2) 寺田川嶋遺跡 (図版15の2) 立山町寺田字川嶋

遺跡は、白岩川と橋津川の合流点の扇状地微高地上に立地し、橋津川北岸に所在する。標高は約15mを測り、規模は東西約200m、南北約350mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、本遺跡より北東約200mの地点に泉藏留遺跡が、北西約200mの地点に寺田正沼遺跡が所在する。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、弥生～古墳時代の土器4片、古代の須恵器杯B蓋1片・杯B身1片・杯1片・壺1片・甕2片・器種不明4片(計10片)、中世の土師器皿1片・珠洲甕2片(計3片)、近世の越中瀬戸皿2片・壺2片・すり鉢1片・伊万里系器種不明1片(計6片)、時期不明の土師器器種不明1片、総計26片である。

以上、本遺跡の採集遺物は縄文時代から近世・近代に至るものであり、扇状地扇端部の利用が盛んであったことを示している。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(3) 寺田正沼遺跡 (図版15の3) 立山町寺田字正沼

遺跡は、白岩川と柄津川の合流点の扇状地上、柄津川東約250m、富山地方鉄道南約100mの地点に立地する。標高は約14mを測り、規模は東西約200m、南北約150mに及ぶものと推定する。本遺跡より東約300mの地点に泉藏留遺跡、南東約200mの地点に寺田川鶴遺跡が立地する。

本遺跡は今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、弥生～古墳時代の土器6片、古代の土師器杯3片・榠1片・壺2片・須恵器杯B蓋1片・杯B身1片・杯A1片・杯11片・壺4片・甕7片(計31片)、中世の土師器皿9片・珠洲壺10片・すり鉢1片・壺1片(計21片)、近世の越中瀬戸榠6片・皿6片・壺12片・すり鉢1片・管状陶錐1点・灯明台1片・伊万里系皿2片(計29片)、総計87片である。これらのうち1点を図示した(図版7の6)。

図版7の6は完形の越中瀬戸管状陶錐である。孔径2cm、外径4cmを測り、重さは48.4gである。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施す。

以上、本遺跡は泉藏留遺跡と同様に、弥生時代以降長く続いた遺跡である。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(4) 泉下役遺跡 (図版15の4、注①) 立山町泉字下役

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、柄津川に寺田川・高野川という小河川が合流する地点の北東約200mの地点に立地する。標高は約11mを測り、規模は東西約200m、南北約150mに及ぶものと推定する。1972年に柄津川下流部の改修工事が行なわれた際、本遺跡より弥生時代の土錐が1点出土しているが、詳細は明らかではない。

今回の調査で採集した遺物は、古代の須恵器壺1片、中世の珠洲壺1片・竜泉窯系青磁碗1片(計2片)、近世の越中瀬戸皿4片・榠1片・壺4片・伊万里系染付皿1片・榠1片・器種不明1片(計12片)、総計15片である。これらのうち3点を図示した(図版7の1～3)。

図版7の1は竜泉窯系青磁碗の胸部破片である。外面には篦引き平行垂下線文、内面には片切彫りの花文を施す。釉調は淡暗緑色を呈し、胎土は緻密である。13世紀前半のものであろう。

2は越中瀬戸の円盤状の蓋であり、復原径は約15cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。表面に重ね焼きの痕跡と自然釉が付着しているため、窯道具として使用した可能性がある。裏面には回転糸切り痕を残す。

3は越中瀬戸皿の底部破片である。底部内外面は淡黄褐色を呈し、内外面の上部には褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密である。内外面ともに回転撚で調整を施し、内面には重ね焼きの痕跡を残す。

以上、本遺跡の採集遺物は古代から近世のものであるが、細片のため遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(5) 浦田柳町遺跡 (図版15の5、注①) 立山町浦田字柳町

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、柄津川に寺田川・高野川が合流する地点より西約150m、富山地方鉄道本線と立山線の分岐点より東約100mの地点に立地する。標高は約10mを測り、

規模は東西約100m、南北約150mに及ぶものと推定する。本遺跡より南西約300mの地点に浦田遺跡が立地している。本遺跡は『立山町史』に、古代の遺跡として記載されている。

今回の調査で採集した遺物は、弥生～古墳時代の土器1片、古代の土師器壺1片・須恵器壺1片（計2片）、中世の土師器皿4片、近世の碗1片・壺1片・皿1片（計3片）、時期不明の土師器1片、総計11片である。

以上、本遺跡の採集遺物は、弥生時代から近世・近代に至るものであるが、細片のため遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。
(清水孝之)

(6) 大明神經塚 (図版15の6、注①) 立山町浦田字新貝273番地

遺跡は、富山地方鉄道寺田駅の西北方、寺田駅変電所に隣接して所在する。

一帯は古くから「大明神」と呼ばれており、「浦田の由緒と名勝史蹟について」には「越中守細川氏の祈願所春日大明神社十二坊の跡なりと傳う…天正年間上杉謙信攻城、細川氏逃れて肥後に走り堂宇は火災に罹りて悉く鳥有に帰せりと…」とある。現在は墓地となっているが、調査等の記録はなく、詳細は不明である。
(森秀典)

(7) 浦田遺跡 (図版15の7、注①・②・③) 立山町浦田字八郎

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部の湧水帶に位置し、板津川に寺田川・高野川が合流する地点の西岸の微高地に立地している。標高は約13mを測り、規模は東西約200m、南北約300mに及ぶものと推定する。

本遺跡は、1972年に家屋新築に際して、弥生時代終末期の土器片が多数出土して発見された。しかし遺跡の詳しい実態は、近年まで不明であった。『立山町史』には、浦田霸氣遺跡と記載されている。

1986・1987年に当地区に宅地造成の申請が提出されたため、立山町教育委員会が試掘と発掘調査を実施し、溝・土坑などの遺構と多数の遺物を発掘した。発掘調査の結果、弥生時代中期の土坑7基・溝2条、中～後期の溝3条、後期の土坑1基・溝3条、平安時代の掘立柱建物16棟・柱穴5基・槽3列・溝1条が検出されている。遺物としては、縄文時代後・晩期の土器、弥生時代中・後期の土器、古代の須恵器・土師器、近世の越中漁戸等が多数出土している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器1片、弥生～古墳時代の壺形土器3片・壺形土器1片・器種不明30片（計34片）、古代の土師器杯5片・壺13片・器種不明11片・須恵器杯B蓋4片・杯A3片・杯7片・壺1片・壺7片・黒色土器の杯1片（計52片）、中世の土師器皿7片・珠洲壺4片（計11片）、近世の越中漁戸皿5片・壺2片・すり鉢1片・伊万里系染付椀1片（計9片）、総計107片である。これらのうち10点を図示した（図版7の16～25）。

図版7の16は壺形土器の肩部から口頸部にかけての破片である。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒が多く含む。外面には口頸部に横位の5本の櫛描き直線と、その下に若干の右下がりの刷毛目調整を施す。内面には粗い刷毛目調整を施す。弥生時代中期初め頃のものであろう。

17は土師器壺の口縁部破片であり、復原口径は約14cmを測る。口縁部は緩やかに外反する。

色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。口縁部外面には縦位の、内面には横位の刷毛目調整を施し、横位の弱い撫で調整を施す。5～6世紀頃のものであろう。

18は土師器長壺の口縁部破片であり、復原口径は約14cmを測る。口縁部は「く」字状に外傾し、口縁端部は内側に肥厚する。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面ともに輪轂による回転撫で調整を施す。輪轂回転方向は右廻りである。9世紀頃のものであろう。

19は土師器長壺の口縁部破片である。口縁部は「く」字状に外傾し、口縁端部は内側と上方に肥厚する。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密である。9世紀末から10世紀頃のものであろう。

20・21は土師器鍋の口縁部破片である。復原口径は20が約30cm、21が約28cmを測る。20は頸部が外傾し、口縁端部は肥厚して面をなす。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面ともに回転撫で調整を施す。21は口縁部がわずかに内凹しながら外傾し、口縁端部は内側に丸く肥厚する。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。20・21ともに10世紀頃のものであろう。

22は須恵器杯B蓋の破片であり、つまみはやや厚い宝珠形を呈する。色調は淡青灰色を呈し、胎土は緻密である。8世紀後半頃のものであろう。

23は土師器杯の口縁部破片であり、復原口径は約12cmを測る。口縁部は緩やかに内凹しながら立ち上がり、口縁端部は内側を丸く、外側をやや鋭く仕上げる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。9～10世紀頃のものであろう。

24は越中瀬戸壺の破片であり、復原口径は約10cmを測る。肩部は緩やかに張り、頸部は短く直立して、口縁端部は丸味を帯びる。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施し、外面の一部に黄色に発色する釉を施す。胎土は砂粒を含み、内外面ともに輪轂回転撫で調整を施す。

25は越中瀬戸すり鉢の口縁部破片である。口縁端部は丸く肥厚し、内外面に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は砂粒を含み、内外面ともに輪轂撫で調整を施す。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至る複合遺跡であり、特に弥生時代から古代にかけての遺物が多い。遺跡は、当地域に比定される初期莊園「大荊莊」を解明する上で、非常に重要な遺跡である。なお遺跡は現在住宅地として利用されている。

(8) 瀬戸前田遺跡（図版15の8）立山町浦田字前田

遺跡は、常願寺川扇状地上、寺田川の西岸に富山地方鉄道立山線を挟んで立地し、その中心に稚児塚古墳が立地する。標高は約15mを測り、規模は東西約400m、南北約350mに及ぶものと推定する。寺田川東岸には寺田越前遺跡が立地している。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、縄文時代の土器4片、弥生～古墳時代の有段口縁壺形土器1片、壺形土器3片、高杯形土器1片、器種不明19片（計24片）、古代の土師器2片、須恵器壺3片、杯1片、器種不明1片（計7片）、中世の土師器皿52片、珠洲甕3片、すり鉢2片、竜泉窯系青磁1片（計58片）、近世の越中瀬戸碗5片、皿10片、壺8片、すり鉢2片、土師器型入土製品1片（計26片）、総計119片である。これらのうち9点を図示した（図版7の7～15）。

図版7の7は胴部破片である。2条の沈線による区画帯を設け、区画帯内に磨消縄文を施す。色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。縄文時代後期のものであろう。

8は高杯形土器の脚部破片である。復原脚端径は約26cmを測る。外面は緩やかに屈曲して開き、内面には小さな段がある。色調は黄白色を呈し、胎土は砂粒を含む。弥生時代末頃のものであろう。

9は有段口縁壺形土器の口縁部破片であり、復原口径は約12cmを測る。段はやや緩やかであり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面に横位の撫で調整を施す。弥生時代末頃のものである。

10は土師器皿であり、復原口径は約10cmを測る。口縁端部はやや鋭く仕上げる。色調は淡灰色を呈し、胎土は緻密である。内外面に撫で調整を施し、口縁部には煤が付着している。灯明皿として使用されたものと推定する。中世のものである。

11は土師器皿であり、復原口径は約9cmを測る。口縁端部はやや鋭く仕上げる。色調は黄白色を呈し、胎土は緻密である。内外面ともに撫で調整を施す。中世のものである。

12は珠洲大甕の口縁部破片であり、復原口径は約26cmを測る。頭部は「く」字状に屈曲し、外面には頭部から口縁部にかけて、口縁部を折り返す際に使用した板状具による圧痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。珠洲Ⅳ期（14世紀頃）のものである。

13は越中瀬戸壺の破片であり、復原口径は約16cmを測る。口縁端部は水平の面をなす。色調は淡黄褐色を呈し、外面には褐色に発色する薄い鉄釉を施す。胎土は砂粒を含み、内外面ともに回転撫で調整を施す。

14は越中瀬戸椀の底部破片である。高台底径は4.8cmを測る。高台の断面は方形である。色調は灰褐色を呈し、内面と外面の上部に、黒色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密で、高台内並びに外面には輻輪回転調整を施す。輻輪回転方向は右廻りである。

15は越中瀬戸椀の底部破片であり、高台底径は4.4cmを測る。高台は削り出しの内反り高台である。内面と外面の上部には褐色に発色する鉄釉を施し、外面の下部と高台には薄い鉄釉を施す。胎土は砂粒を含む。外面には輻輪回転割り調整を施す。輻輪回転方向は右廻りである。

以上、本遺跡は縄文時代から中・近世に至る複合遺跡と推定するが、弥生時代と中世の遺物が特に多い。従って円墳として富山県下最大である稚児塚古墳築造の背景を把握する上で、本遺跡は重要な位置を占めている。なお遺跡は現在水田として利用されている。（清水孝之）

(9) 稚児塚古墳（図版15の9、図版3～6、注①・④・⑤）立山町浦田字前田185番地

稚児塚古墳は常願寺川と白岩川が形成した扇状地扇端部の水田中に立地する。現在墳頂部には枯死した大木を祀った社が建ち、周溝西側の一部を富山地方鉄道立山線が通っている。当古墳は1907年に吉田文俊氏、1908年に坪井正五郎氏によって墳丘西南部を調査されているが、古墳に関係する遺物は出土していない。また1978年、立山町教育委員会が行なった周溝確認調査では弥生時代末頃の溝を検出し、古墳東方にこの時期の遺跡が存在することが判った。ただし

古墳に直接関係する遺物は出土しなかった。なお稚兒塚古墳の築造時期については、平地に築造されていることなどから5世紀中頃、5世紀中～末頃とする二説がある。

今回の測量調査の結果、当古墳は周溝・葺石を備える円墳であり、裾部での直径は南北45.2m×東西46.0m、墳丘を囲む石列（後世のもの）からの直径は南北49.6m×東西52.0mを測ることが判明した。周溝と考え得る水田の幅は狭いところで約16m、広いところでは約23mであり、これを含めた直径は南北89.0m×東西91.4mを測る。また水田面からの比高は7.3～7.4mである。なお、墳丘・周溝は正円ではなく、西へ張り出しをもち、今後の確認調査が待たれる。

墳丘及び周溝付近からは弥生～古墳時代の土器7片、古墳時代初頭の土師器3片、時期不明土師器2片、時期不明須恵器1片、中世の土師器3片、近世の越中瀬戸碗1片・産地不明染付碗1片、計18片を採集し、これらのうち2片を図示した（図版10の9・10）。

図版10の9は墳丘東側周溝内で採集した土師器壺形土器の底部であり、底径4.0cmを測る。色調は外側が灰白色、内側が暗灰色であり、胎土は1～2mm大の砂粒を含み、体部内外面には刷毛目調整を施している。古墳時代初頭のものであろう。

10は墳丘北側斜面で採集した越中瀬戸碗であり、底径5.4cmを測る。胎土は砂粒を含み、体部内外面に黒色に発色する鉄釉を施す。近世末～近代頃のものであろう。これら2点は、いずれも古墳の築造時期を示すものではなく、付近一帯に広がる浦田前田遺跡と関連するものと考え得る。なお当古墳では形象埴輪の出土が伝えられているが、今回の調査では埴輪を採集することはできなかった。また稚兒塚古墳の北東約80mの水田中に、瓢塚・服部塚が存在していたが現在は破壊され水田や排水路となっている。瓢塚については周囲の出土遺物から中世以降のものである可能性が強いことが指摘されている。

稚兒塚古墳は浦田前田遺跡とは密接な関わりを持つと考え得るが、古墳の築造が遺跡の盛衰とどの様に関わっているかを今後検討していく必要がある。また当古墳は富山県下最大の円墳であり、第3章において北陸の他古墳と比較して、その意義について検討することにする。

（田島富慈美）

10 若林階子田遺跡（図版15の10）立山町若林字階子田

遺跡は、常願寺川扇状地の微高地に立地し、富山地方鉄道立山線の西側に所在する。寺田三十石遺跡とは北側で隣接する。標高は約18mを測り、規模は東西約200m、南北約250mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見された遺跡であり、採集遺物は、縄文時代の土器1片、弥生～古墳時代の壺形土器1片・器種不明1片（計2片）、古代の土師器器種不明1片・須恵器杯1片（計2片）、中世の土師器皿1片・竜泉窯系青磁皿1片（計2片）、近世の越中瀬戸皿1片・壺1片（計2片）、総計9片である。これらのうち1点を図示した（図版7の33）。

図版7の33は土師器皿であり、復原口径は約9cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面に撫で調整を施す。中世のものである。

以上のはか本遺跡の採集遺物はいずれも細片のため、遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は

現在水田として利用されている。

(1) **若林大丸遺跡** (図版15の11) 立山町若林字大丸

遺跡は、常願寺川扇状地上に立地し、新寺田変電所から南西約100mの地点に所在する。標高は約20mを測り、規模は寺田川を挟んで、東西約200m、南北約250mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、縄文時代の土器62片、古代の須恵器杯B蓋1片、中世の土師器皿3片・珠洲蓋2片(計5片)、近世の越中瀬戸壺1片・器種不明2片(計3片)、総計71片である。遺物は寺田川左岸に集中する。これらのうち7点を図示した(図版7の26~31、図版10の19)。

図版7の26は深鉢の胴部破片である。外面には横位のL R縄文を施し、内面には赤色顔料を塗布する。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒が多く含む。縄文時代中期頃のものであろう。

27は深鉢の口縁部から胴部の破片である。復原口径は約15cmを測る。器壁は薄く、外傾しながら立ち上がる。口縁端部は半截竹管によって丸く調整し、その直下から横位のL R縄文を施す。内面は磨いている。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密である。内外面には煤が付着している。縄文時代中期頃のものであろう。

28は縄文土器深鉢の胴部破片である。器壁は厚く、外面に横位のR L縄文を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。外面には煤が付着している。時期は不明である。

29は縄文土器深鉢の胴部破片である。28と同一個体と推定する。器壁は厚く、外面に横位のR L縄文を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。時期は不明である。

30は縄文土器深鉢の胴部破片である。器壁は薄く、外面に横位の直前段多条の三本燃りL R縄文を施していると推定する。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密で纖維を含む。時期は不明である。

31は縄文土器の口縁部破片である。口縁端部に棒状具を押し当てて、小突起を作り、口縁直下に半截竹管文を廻らす。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。時期は不明である。

図版10の19は深鉢の口縁部から胴部の破片である。復原口径は約30cmを測る。器壁は厚く、胴部は緩やかに膨らみ、頸部でややくびれ、口縁部に至って再び緩やかに張り出し、内傾する。頸部内面に稜を持ち、更に磨いている。口縁端部は面をなし、全体的に弱いキャリバー形を呈する。外面には横位のR L縄文を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。外面には煤が付着している。縄文時代中期前業~中業のものであろう。

以上、本遺跡は縄文時代中期を主体とする遺跡であり、縄文遺跡の扇状地への進出を考える上で重要な位置を占めている。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(2) **寺田三十刈遺跡** (図版15の12) 立山町寺田字三十刈

遺跡は、常願寺川扇状地上に立地し、柄津川と寺田川に挟まれ、両河川の合流点の南約250mの地点に所在する。標高は約13mを測り、規模は東西約150m、南北約300mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、本遺跡から南約250mの地点に寺田越前遺跡が、

西約500mの地点に浦田遺跡が、南西約300mの地点に浦田前田遺跡が各々立地する。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器1片、弥生～古墳時代の土器3片、古代の土師器壺1片・黒色土器皿1片（計2片）、中世の珠洲壺2片、近世の越中瀬戸皿1片・染付器種不明1片（計2片）、総計10片である。これらのうち1点を図示した（図版7の32）。

図版7の32は胸部破片である。外面には半隆起線による区画帯を設ける。内外面ともに磨耗が著しく充満文は不明である。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。縄文時代中期前葉～中葉のものであろう。

以上、本遺跡の採集遺物はいずれも細片のため、遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(13) 寺田越前遺跡（図版15の13）立山町寺田字越前

遺跡は、常願寺川扇状地上、寺田川東岸に立地し、寺田集落より南約150mの地点に所在する。標高は約15mを測り、規模は東西約200m、南北約200mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、弥生～古墳時代の変形土器1片・器種不明6片（計7片）、古代の須恵器壺1片・黒色土器器種不明1片・器種不明2片（計4片）、中世の土師器皿4片・珠洲壺3片・すり鉢2片・白瓷系壺1片（計10片）、近世の越中瀬戸碗5片・皿5片・壺4片・すり鉢2片・伊万里系染付碗1片・皿1片・染付器種不明1片（計19片）、総計40片である。これらのうち3点を図示した（図版7の34～36）。

図版7の34は有段口縁壺形土器の口縁部破片である。復原口径は約14cmを測る。口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く收める。色調は明茶褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面ともに横位の撫で調整を施す。弥生時代末頃のものであろう。

35は珠洲すり鉢の口縁部破片であり、復原口径は約32cmを測る。口縁端部は面をなして内傾し、8本の櫛描きによる波状文を施す。内面には6本のおろし目を施す。色調は暗青灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、緻密である。珠洲V期（15世紀頃）のものである。

36は越中瀬戸碗の底部破片であり、復原高台径は約6cmを測る。高台は削り出しであり、断面は方形を呈する。色調は明茶褐色を呈し、外面上部に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は砂粒をわずかに含む。底部外面には回転旋削り調整を、内面には輪轂回転撫で調整を施す。輪轂回転方向は右廻りである。

以上、本遺跡は弥生時代から近世・近代に至るまで、比較的平均して遺物を採集できる。なお遺跡は現在水田として利用されている。

（清水孝之）

(14) 若林経塚（図版15の14）立山町若林字経塚

遺跡は若林集落の南東約150mに所在した。同地内に「経塚」の小字名を残す。

地元の人によると、前半時に一字一石経を出土したというが、遺物・記録などが残っておらず詳細は不明である。

（森秀典）

(15) 若宮A遺跡（図版15の15、注①・⑥・⑦・⑧）立山町若宮字宮田

遺跡は、常願寺川扇状地上、下段段丘の末端部に立地し、南北に流れる板津川によって開析された微高地上に所在する。標高は約20mを測り、規模は若宮神社を中心に、北陸自動車道を挟んで東西約450m、南北約400mに及ぶものと推定する。

遺跡は、高速道路工事着工に伴い記録保存のため、若宮神社の東側隣接地を対象として、1976・1978年に予備調査が、1979年に発掘調査が実施された。調査の結果、遺構として縄文時代の石組炉、中世の欄・溝・土坑が検出された。遺物は縄文時代早・中期の土器・石器、古墳時代の須恵器、中世の珠洲壺・すり鉢・土師器小皿、近世の越中瀬戸などが出土している。

今回の調査で採集した遺物は、弥生～古墳時代の土器4片、古代の土師器器種不明9片、須恵器壺1片（計10片）、中世の土師器皿18片、近世の越中瀬戸碗3片、皿4片、壺7片・すり鉢1片・器種不明1片（計16片）、総計48片である。これらのうち1点を図示した（図版7の42）。

図版7の42は越中瀬戸碗の底部破片であり、復原高台径は約7cmを測る。高台は削り出しである。色調は淡黄褐色を呈し、高台外面下部には褐色に、内面及び外面上部に黒色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密であり、外面に回転範囲削り調整を施す。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至るまでの複合遺跡であり、扇状地扇端部の利用が安定して続いたことを示している。なお遺跡は現在住宅地と水田に利用されている。

(16) 若宮B遺跡（図版15の16、注①・⑥・⑦・⑧）立山町若宮字南地免

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部に立地し、若宮A遺跡の北東約200mの地点に所在する。両遺跡間に湧水地があることや地山土層に違いがあるため、本遺跡は板津川によって形成された自然堤防上に位置するものと推定する。標高は約17mを測り、規模は板津川・北陸自動車道を挟んで、東西約300m、南北約300mに及ぶものと推定する。

本遺跡は、高速道路工事着工に伴い記録保存のため、1976年に予備調査が、1978・1979年に発掘調査が実施された。調査の結果、遺構として縄文時代の小ピット1基、古墳時代の堅穴住居2棟・土坑2基・溝2条、中世の掘立柱建物20棟・欄8列・井戸5基・溝4条などが検出された。遺物は、縄文時代中・晚期の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器・子持勾玉・有孔円板・砥石・木製品、古代の土師器・須恵器、中世の珠洲・土師器小皿・砥石・ふいご羽口・鉄鋤・木製品、近世の越中瀬戸などが多数出土している。

今回の調査で採集した遺物は、弥生～古墳時代の土器3片、古代の土師器1片、中世の土師器皿12片、珠洲壺4片（計16片）、近世の越中瀬戸碗2片、皿5片・管状陶錘1片・器種不明1片（計9片）、総計29片である。これらのうち5点を図示した（図版7の37～41）。

図版7の37は土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約10cmを測る。口縁部は弱く屈曲し、口縁端部は丸く取める。色調は明茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。内外面ともに横位の撫で調整を施す。中世後期のものである。

38は越中瀬戸皿の底部破片である。高台は無く、底径は4cmを測る。底部外面には回転糸切

り痕を、内面には重ね焼きの痕跡を残す。色調は淡黄褐色を呈し、内面に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密である。内外面ともに轆轤回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

39は越中瀬戸管状陶錐の小破片である。復原孔径は2cm、外径は4cmを測り、重さは0.32gである。内外面に褐色に発色する鉄釉を施し、胎土は砂粒をわずかに含む。

40は土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約10cmを測る。粘土板を折り曲げて作り、口縁端部は鋭く仕上げる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含むが、精良である。内外面ともに横位の撫で調整を施す。中世後期のものである。

41は土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約11cmを測る。粘土板を折り曲げて作り、口縁部は直線的に立ち上がり、やや肥厚して、口縁端部に弱い面をとる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。13世紀頃のものである。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至るまでの複合遺跡であるが、子持勾玉が出土していることから、古墳時代の祭祀や集落を考える上で重要な遺跡と考えられる。なお遺跡の大部分は、現在水田として利用されている。

なお今回の調査以前に、若宮A・B遺跡付近において、林十三郎氏が採集した遺物を図示した(国版8の1~8、国版10の20)。

国版8の1は磨製石斧である。刃部約3分の1を欠損し、残存長7.5cm、最大幅4.8cmを測る。重さは5.68gである。石材は凝灰岩である。

2は須恵器椀の底部破片であり、復原高台径は7.2cmを測る。底部外面には回転糸切り痕を残し、矮小化した高台がつく。色調は灰青色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。体部内外面には、回転撫で調整を施す。10世紀中頃のものである。

3は珠洲壺の口縁部から肩部にかけての破片であり、復原口径は約20cmを測る。口頭部は外傾しながら立ち上がり、口縁端部は面を成し、外側に突出する。肩部外面には横位の平行叩きを施し、肩部内面には当て具痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。珠洲Ⅲ期(13世紀後半頃)のものであろう。

4は珠洲大甕の口縁部破片であり、復原口径は約30cmを測る。口頭部は短く、外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収める。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。内外面ともに横位の撫で調整を施す。珠洲Ⅴ期(15世紀頃)のものであろう。

5は珠洲大甕の口縁部から肩部の破片であり、復原口径は約30cmを測る。口縁部から肩部にかけて鋭く屈曲し、口縁部は肥厚する。口縁端部は丸く収める。肩部外面には横位の平行叩きを施し、肩部内面には当て具痕を残す。色調は灰青色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含むが、緻密である。口縁部外面には、回転撫で調整を施す。珠洲Ⅱ期(13世紀前半頃)のものであろう。

6は珠洲甕の肩部破片である。口縁部から肩部にかけて緩やかに屈曲し、頭部の下端外面に

段を持つ。肩部外面には細かい横位の平行叩きを施し、肩部内面には当て具痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。珠洲Ⅰ～Ⅱ期（12世紀後半から13世紀前半頃）のものであろう。

7は珠洲壺の胴部破片である。外面には右下がりの粗い平行叩きを施し、内面には当て具痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。

8は越中瀬戸壺の底部破片であり、復原底径は約9cmを測る。底部外面には回転糸切り痕を残す。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施し、胎土は砂粒を含む。内面に、回転撲で調整を施す。

図版10の20は珠洲壺の口縁部から肩部にかけての破片であり、復原口径は約24cmを測る。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや肥厚し、外輪しながら段を成す。肩部外面には段が2段あり、その直下より右下がりの細かい平行叩きを施す。内面には当て具痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。珠洲Ⅰ期（12世紀後半頃）のものであろう。

（清水孝之）

(1) ²²辻遺跡（図版15の17、注②）立山町辻字西吉原

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、柄津川東岸の小支谷によって開析された微高地上に立地し、標高は21～24mを測る。規模は東西約600m、南北約350mと推定する。

1987年に立山町教育委員会が発掘調査を行ない、その結果、弥生時代後期の住居跡と、埋葬坑らしきものを含む各種の土坑や溝、奈良時代の土坑、中世の大小2条の溝を検出した。中世の溝には祭祀的色彩の濃い遺物が多いことから、近くで何らかの祭祀を行なって一括投棄され、それが溝底に溜ったものと推測されている。

遺物は、弥生～古墳時代の壺形上器、壺形土器、高杯形土器、器台形土器、蓋形土器や、砥石などの石器・土製紡錘車、古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器・ふいごの羽口・砥石、中世の箸・折敷・曲物・底板・竹製容器・木製糸巻き・物指状木製品・柄・杭・部材・板碑状木製品・駒形・陽物・人形・形代・刀形や、土師器皿・中国製磁器・珠洲、他に弥生～鎌倉時代の植物遺体と、多様な遺物が出土している。

今回の調査で採集した遺物は、弥生～古墳時代の壺形土器1片・器種不明78片（計79片）、古代の土師器壺3片・須恵器杯B蓋5片・杯B身3片・杯6片・蓋4片・壺13片・鉢1片（計35片）、中世の土師器皿14片・珠洲壺11片・すり鉢3片・竈泉窯系青磁碗2片（計30片）、近世の越中瀬戸碗1片・皿8片・壺9片・伊万里系染付碗1片・不明染付碗1片・型入土製品1片（計21片）、総計165片であり、そのうち11点を図示した（図版8の9～22）。

図版8の9・10は有段口縁壺形土器である。9は頸部が直立し、口縁部にかけて外反する。色調は淡黄褐色を呈し、調整は風化のため不明である。弥生時代末頃のものである。10は内面は横位の撲で調整、外面は刷毛目調整の後、横位の撲で調整を施す。色調は外面淡赤褐色、内面淡褐色を呈する。

11は壺形土器の口縁部である。口縁は外反し、端部を丸く收める。色調は淡褐色を呈し、焼成は悪い。風化が著しく調整は不明である。弥生時代中期のものであろう。

12は須恵器杯Bの蓋である。口縁端部は丸く收める。色調は灰青色を呈し、内面に自然釉がかかる。内外面ともに回転撫で調整を施す。9世紀頃のものであろう。

13は須恵器杯Aである。復原口径は約11cmを測る。色調は淡青灰色を呈し、体部外面下半に自然釉がかかる。内外面に回転撫で調整を施す。8~9世紀頃のものであろう。

14は須恵器鉢である。口縁部はほぼ水平に広く面をとる。色調は青灰色を呈する。内外面に回転撫で調整を施す。

15は小型の土師器壺である。口縁部は「く」字状に外反し、端部は上方に屈曲する。色調は淡褐色を呈する。調整は風化が著しく不明である。9~10世紀頃のものであろう。

16は土師器壺の口縁部の破片である。口縁端部が上方に屈曲、肥厚する。色調は淡褐色から赤褐色を呈する。調整は不明である。10世紀頃のものであろう。

17・18は土師器皿である。17は復原口径は約9cmを測る。色調は淡褐色を呈し、口縁部内面に煤が付着する。内外面に横位の撫で調整を施す。18は復原口径約12cmを測り、体部から口縁部にかけて内彎ぎみに立ち上がる。色調は淡褐色から赤褐色を呈し、焼成は悪く、底部は剝離して割れている。底部外面には不定方向の撫で調整、口縁部外面には横位の撫で調整を施す。17・18とも13世紀頃のものであろう。

19は竜泉窯系青磁碗の底部である。胎土は白色、精良であり、高台内を除く全面に厚い釉がかかる。

20は珠洲大壺の破片である。口頸部は弓なりに外反しつつ一旦立ち上がり、先端が嘴状に拡張する。色調はやや黒みがかった灰青色を呈し、自然釉が外側頸部を除く内外面にかかる。頸部内外面に回転撫で調整を施している。珠洲Ⅰ期(12世紀後半頃)に比定できる。

21は珠洲壺の胴部破片である。色調は灰青色を呈し、胎土は黒色砂粒を多く含む。外面に平行叩き目、内面に当て其の痕跡を残す。

22は珠洲すり鉢である。口縁部は弱く屈曲し、内側に面をなす。色調は淡青色を呈する。内外面に回転撫で調整を施す。珠洲Ⅳ期(14世紀頃)に比定できる。

以上、本遺跡は弥生時代から近世・近代にかけて長く営まれた遺跡であり、特に弥生時代から古代にかけては、当地域の中心的な遺跡のひとつであったと推定できる。なお遺跡は現在南端の一部が宅地となっているほか、ほとんどが水田として利用されている。
(山本慎子)

（図版15の18）立山町辻字宮下

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、辻遺跡の南東約500mに立地する。標高は約27mを測り、規模は東西約550m、南北約400mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器12片・磨製石斧1点、弥生~古墳時代の壺形土器1片・器種不明6片(計7片)、古代の土師器壺3片・器種不明21片・須恵器杯A2片・

杯7片・壺11片・壺16片（計60片），中世の土師器皿25片・珠洲壺15片・すり鉢9片（計49片），近世の越中漬戸碗5片・皿11片・壺9片・すり鉢3片・伊万里系染付碗4片・器種不明1片・東海系と推定する陶器すり鉢1片・土師器煙入2片・寛永通宝2点（計38片），総計167片であり，これらのうち9点を図示した（図版9の13～21）。

図版9の13は壺形土器の口縁部破片である。口縁部は指頭押圧によって小波状を呈する。色調は淡褐色を呈し，胎土は砂粒を含む。粘土帯を外傾させて積み上げ，内面を刷毛で調整した後に撫で調整を施す。器形に縄文土器の伝統を残す弥生時代前期頃の土器であろう。

14は縄文時代の定角式磨製石斧であり，基部を欠損する。残存長約11cm，刃部幅約6cmを測り，重さは246.6gである。石材は安山岩である。

15は土師器壺の口縁部破片である。「く」字状に外反し，端部は上方に肥厚する。色調は淡黄褐色を呈する。10世紀頃のものである。

16は須恵器横瓶である。色調は灰青色を呈し，内面に同心円文，外面に平行叩きの後にかき目を施す。8世紀頃のものである。

17は珠洲すり鉢である。色調は内面が灰褐色，外面は灰青色を呈する。胎土に白色粒を含む。内外面に回転撫で調整を施した後に，内面に11条の櫛状工具でおろし目をつける。底部外面には撫で調整を施し，櫛轆回転方向は右廻りである。珠洲Ⅲ期（13世紀後半頃）のものであろう。

18は珠洲すり鉢である。口縁部が水平の面をなし，やや外方に拡張する。色調は灰青色を呈する。内外面に回転撫で調整を施す。櫛轆回転方向は右廻りである。珠洲Ⅱ～Ⅲ期（13世紀頃）のものであろう。

19は珠洲大壺の底部破片である。色調は青灰色を呈する。内面に当て具痕を残し，外面に平行叩き調整を施す。

20は陶器すり鉢である。口縁端部が水平の面をなし内側に肥厚する。内面に8条以上の櫛で右下がりのおろし目をつける。内外面に暗褐色に発色する薄い鉄釉を施している。近世初頭の漬戸・美濃系のすり鉢と推定する。

21は越中漬戸皿である。内面底部に菊花文を押捺し，口縁部内外面に灰釉を施している。近世初頭のものであろう。

以上，本遺跡は縄文時代から近世に至るまで各時代にわたって，かなりの遺物を採集できることに特色がある。なお遺跡は現在西北約4分の1は集落，他は水田として利用されている。

（長谷川健一）

（19）辻向田遺跡（図版15の19）立山町辻字向田

遺跡は，常願寺川扇状地扇端部，辻遺跡の南西約300mの地点に立地し，標高は約28mを測る。規模は東西約400m，南北約450mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。今回の調査で採集した遺物は，縄文土器3片，弥生～古墳時代の土器19片，古代の土師器杯1片・壺3片・器種不明4片，須恵器杯B蓋6片・杯身3片・杯6片・壺7片・壺6片・不明1片（計37片）。

中世の土師器皿8片・珠洲壺6片・すり鉢1片（計15片）、近世の越中瀬戸碗4片・皿8片・壺11片・すり鉢1片・伊万里系染付椀1片・皿1片・型入土製品1片（計32片）、計106片であり、これらのうち7点を図示した（図版8の23～29）。

23は深鉢の口縁部破片である。色調は赤褐色を呈する。半截竹管による渦巻状の半隆起線上に、櫛状工具で連続刺突文を施す。縄文中期中葉の天神山式のものであろう。

24は深鉢体部の破片である。色調は淡褐色を呈する。上部に半截竹管による3条の半隆起線をめぐらす。縄文時代中期のものであろう。

25は珠洲すり鉢の口縁部破片である。口縁端部に面をとる。色調は淡灰青色を呈する。珠洲一期（12世紀後半頃）のものであろう。

26は越中瀬戸灰釉灯明皿である。内面に灰釉がかかり、外面は回転施削り調整を施す。

27～29は越中瀬戸皿である。27は内外面に灰釉がかかる。高台は削り出して基底状に仕上げる。内外面に回転施削り調整を施す。

28は底部を削り出して基底状に仕上げる。体部の内外面に茶色に発色する鉄釉を施す。内面に回転施削り調整を施す。

29は内面に鉄釉がかかる。体部内外面に回転施削り調整を施し、底部は高台がなく回転糸切り痕を残す。底部内面には重ね焼きの痕跡がある。

以上、本遺跡は縄文時代から中・近世に至るまで長く続いた遺跡であるが、10ヶ所地区において古代の遺物をかなり多く採集できた。なお遺跡は現在水田として利用されている。

例）辻坂の上遺跡（図版15の20、注⑥・⑦・⑧）立山町辻坂の上

遺跡は、柄津川左岸約600m、辻向田遺跡の西南約250mと、常願寺川扇端部のやや扇央寄りに立地する。規模は東西約200m、南北約150mと推定する。標高は約30mを測る。

1976年には、ほ場整備事業にともない、次いで1979年に北陸自動車道立山インターチェンジの建設にともなって、富山県教育委員会が3次にわたる発掘調査を実施した。その結果、縄文中期初めの土坑2基、縄文早・前・中期の土器・石器、および6世紀後半の溝4条・土坑5基、土師器壺・壺・高杯・瓶・支脚、須恵器杯・高杯が出土したとされている。また縄文中期初めの土坑は炉跡の可能性があり、古墳時代の溝の内側には堅穴住居が存在したであろうことが示されている。

遺跡は現在、立山インターチェンジの料金所となっているため、分布調査では縄文時代、古代、近世の土器を各1片ずつ採集したにとどまった。

例）高原橋場遺跡（図版15の21、注①）立山町高原字橋場

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、柄津川の西岸沿いに立地し、標高は約36mを測る。規模は東西約350m、南北約600mと推定する。『立山町史』には縄文時代の高原遺跡として名が挙げられているが、遺跡の詳細については充分に判っていないかった。今回の調査で採集した遺物は、縄文土器14片・石器1点（計15片）、弥生～古墳時代の土器7片、古代の土師器杯2片・器種

不明8片・須恵器杯A1片・杯B蓋2片・杯4片・壺4片・甕3片・鉢1片・器種不明1片(計33片)、中世の土師器皿16片・珠洲甕4片・すり鉢9片(計29片)、近世の越中瀬戸椀15片・壺19片・皿16片・すり鉢4片・伊万里系染付椀2片・皿1片・器種不明1片・不明染付1片・刷毛手唐津1片・寛永通宝1点(計61片)、総計138片であり、これらのうち4点を図示した(図版8の30~33)。

30は石鐵である。基部をわずかに欠損し、残存長1.7cm、残存基部幅1.7cm、重さは0.9gを測る。石材はガラス質の安山岩である。

31は珠洲甕の口縁部破片である。胎土は砂粒を含み緻密である。口縁部は外反ぎみで嘴状に突出する。色調は淡青灰色を呈する。内外面ともに、回転撫で調整を施す。頸部に指頭圧痕や撫で状の痕跡を残す部分がある。珠洲II~III期(13世紀頃)のものであろう。

32は「く」字状口縁をもつ珠洲甕である。色調は青灰色を呈し、外面に平行叩きをもつ。珠洲II~III期(13世紀頃)のものであろう。

33は越中瀬戸皿である。底部は削り出して筈基底状に仕上げる。体部内外面に灰釉を施す。内面は回転撫で調整、外面に回転窓割り調整を施す。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代にわたる遺跡であり、時期が降るほど多くの遺物を探集できた。なお遺跡は現在ほとんどが水田として利用されている。

(2) 高原早稲田遺跡(図版15の22) 立山町高原字早稲田

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、高原橋場遺跡の東北に立地し、標高は約32mを測る。東西約100m、南北約150mの規模と推定する。今回新たに発見した遺跡である。今回の調査で採集した遺物は、弥生・古墳時代の土器5片、古代の須恵器杯B蓋2片・杯B身1片・杯1片・壺2片(計5片)、中世の珠洲甕1片、近世の越中瀬戸灰釉香炉1片・椀4片・壺2片・すり鉢2片(計10片)、総計20片であり、これらのうち1点を図示した(図版8の36)。

36は越中瀬戸無釉の壺である。口縁部は丸く收め、外側に肥厚する。色調は淡褐色を呈し、胎土は石英粒・白色粒を多く含む。内外面に横位の撫で調整を施す。

以上、本遺跡は弥生時代から近世・近代にわたるものであるが、弥生時代~古代の遺物が主体をなす。なお遺跡は現在宅地や水田となっている。

(山本慎子)

(3) 高原諭訪遺跡(図版15の23) 立山町高原字諭訪

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、让宮下遺跡の南約350mに立地する。標高は約30mを測り、規模は東西約380m、南北約230mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、弥生~古墳時代の甕形土器1片・器種不明14片(計15片)、古代の土師器甕2片・器種不明2片・須恵器杯B蓋3片・杯B2片・杯A1片・杯5片・壺5片・壺10片・黒色土器1片(計31片)、中世の土師器皿3片・珠洲甕2片・竜泉窯系青磁2片(計7片)、近世の越中瀬戸椀8片・皿11片・壺15片・すり鉢4片・伊万里系染付椀1片(計39片)、総計94片である。これらのうち12点を図示した(図版9の1~12)。

図版9の1は須恵器杯B蓋である。口縁端部を下方に折り曲げる。色調は暗青灰色を呈し、内外面ともに回転撫で調整を施す。8世紀後半から9世紀頃のものであろう。

2は須恵器杯Bである。体部と底部の境よりかなり内側に断面方形の高台をつける。色調は灰青色を呈し、内外面ともに回転撫で調整を施している。8世紀前半のものである。

3は須恵器杯Bである。高台はやや丸味を持つ。色調は内面が淡灰色、外側が暗青灰色を呈する。内外面ともに回転撫で調整を施す。8世紀後半から9世紀頃のものであろう。

4は土師器皿である。復原口径は約10cmである。色調は淡褐色を呈する。口縁部に回転撫で調整を施し、煤が付着している。中世後期のものである。

5は越中瀬戸皿である。内面底部に菊花文を押捺し、体部と口縁部に灰釉を施す。内外面に回転撫で調整を施し、高台部は基筒底状を呈する。

6は越中瀬戸皿である。高台部は基筒底状を呈する。内面底部にくずれた菊花文を押捺している。色調は暗赤褐色を呈し、体部口縁部は灰釉を施す。回転撫で調整を施す。

7は越中瀬戸皿である。復原口径は約10cmである。口縁部内外面にのみ褐色に発色する鉄釉を施している。内外面ともに回転撫で調整を施す。

8は越中瀬戸碗である。高台を削り出し断面梯形に仕上げている。内面と体部外面に黒色に発色する鉄釉を施す。

9は越中瀬戸皿である。高台は断面三角形で基筒底に近い形を呈している。体部外面に褐色に発色する鉄釉を施す。

10は越中瀬戸皿である。高台は削り出して基筒底に近い形を呈している。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

11は越中瀬戸壺である。復原口径は約8.6cmである。丸みを持つ肩に短く直立する口縁部がつく。内外面に赤褐色に発色する鉄釉を施す。内外面ともに回転撫で調整を施す。

12は越中瀬戸すり鉢である。内外面に茶色に発色する薄い鉄釉を施す。内面に密におろし目をつけ、底部外面には刷毛目状の調整を施し、外面に回転撫で調整を施す。

以上、本遺跡も辻宮下遺跡と同様に縄文時代から近世・近代に至る遺物を採集できる。なお遺跡は現在東端が集落であるが、その他は水田として利用されている。

(24) 高原念仏塚遺跡(図版15の24) 立山町高原字念仏塚

遺跡は、常願寺川脇状地脇端部、柄津川右岸に立地する。標高は約35.5mを測り、規模は東西約150m、南北約280mと推定する。なお高原早稻田遺跡と高原念仏塚遺跡は、従来、高原橋場遺跡と呼ばれていたが柄津川右岸部を分離して新設した遺跡群である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器5片・磨製石斧1点、近世の越中瀬戸碗9片・皿10片・壺85片・香炉1片(計105片)、総計111片であり、これらのうち10点を図示した(図版9の26~35)。

図版9の26は深鉢の胴部破片である。渦巻状に半隆起線文を施している。色調は暗茶褐色を

呈する。縄文時代中期中葉古府式に属するものであろう。

27は深鉢の胴部破片である。縦に半截竹管による区画帯をつくり、その内部に平行線文を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期前葉新崎式のものであろう。

28は深鉢の口縁部破片である。横に走る半隆起線文と縦に走る一条の沈線を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期のものであろう。

29は深鉢の口縁部破片である。口縁端部内面は貼り付けによって肥厚し、口唇端部と内面に沈線を施す。外面は棒状工具による沈線が縦に一条走る。色調は内面が黄褐色、外面が赤褐色を呈する。縄文時代中期後葉のものであろう。

30は深鉢の口縁部破片であろう。口縁端部を肥厚させて内面に面をなす。外面に横位の半隆起線文を施す。色調は淡褐色を呈する。縄文時代中期前葉のものであろう。

31は越中瀬戸壺である。復原口径は約14cmを測る。丸味を持つ肩部に短く直立する口縁部がつき、暗茶褐色に発色する鉄釉を施している。

32は越中瀬戸の無釉壺である。外面に「南」という文字を墨書している。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

33は越中瀬戸の無釉壺である。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。頂部外面に糸切り痕を残す。

34は越中瀬戸の無釉壺である。復原口径は約10cm、復原器高は約11cmを測る。色調は赤褐色を呈する。底部外面に糸切り痕を残し体部・口縁部内外面には糠粃回転撫で調整を施す。

35は縄文時代の定角式磨製石斧である。基部の幅約7cm、残存長約7cmを測り、重さ169.8gである。石材は砂岩であろう。

以上、本遺跡は縄文時代の遺物も存在するが、近世の遺物が大量に散布する。なお遺跡は現在北部が集落、その他は水田として利用されている。

(25) 高原下大門遺跡 (図版15の25) 立山町高原字下大門

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、板津川右岸の高原念仏塚遺跡の南約400mに立地する。標高は約44mを測り、規模は東西約300m、南北約300mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器177片、弥生～古墳時代の土器8片、古代の須恵器B蓋1片・杯1片・壺2片(計4片)、中世の上師器皿6片・珠洲壺4片・竜泉窯系青磁碗1片(計11片)、近世の越中瀬戸碗3片・皿4片・壺4片・すり鉢1片・器種不明1片・伊万里系染付椀3片・唐津鉢1片(計17片)、総計217片である。これらのうち4点を図示した(図版9の22～25)。

図版9の22は深鉢の胴部破片であろう。半截竹管によって渦巻文か「J」字状文をつくり、棒状工具による2段の刺突列点文を施す。色調は暗褐色を呈する。縄文時代中期中葉古府式に属するものであろう。

23は深鉢の胴部破片である。縁に走る半隆起線による区画帯をつくり、区画帯内を左下がりの斜行沈線で充填する。色調は明褐色である。縄文時代中期前葉新崎式に属するものであろう。

24は深鉢の口縁部であろう。口縁に1条の沈線を横走させる。色調は赤褐色を呈する。縄文時代後期のものである。

25は土師器皿である。口縁部の内外面に横位の撫でを施し、端部を鋭く仕上げる。色調は赤褐色を呈する。中世後期のものである。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代までの遺物が散布するが、本年度調査において最も多くの縄文土器を採集できた遺跡である。弥生時代以降の遺物の散布は少ない。なお遺跡は現在、住宅地と水田として利用されている。

(2) 上女川新遺跡 (図版15の26) 立山町上女川新

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、下女川新遺跡の南西約600mに立地する。標高は約44mを測り、規模は東西約400m、南北約330mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器21片、弥生・古墳時代の土器5片、古代の土師器1片、近世の越中瀬戸椀8片・皿7片・壺5片・すり鉢1片・不明3片・伊万里系染付4片・不明染付椀1片(計29片)、総計56片である。これらのうち3点を図示した(図版10の1~3)。

図版10の1は縄文土器の浅鉢又はキャリバー状深鉢の口縁部破片である。口縁部は内側に内彎し、口縁端を内側に折り曲げ、わずかに肥厚させる。外面に横位のR L縄文を施す。色調は暗褐色を呈し、胎土には白色粒を含む。時期は不明である。

2は深鉢の胴部破片である。外面に正位格子目文を施す。色調は明褐色を呈し、胎土に白色粒と石英粒を含む。縄文時代中期前葉新崎式に属するものであろう。

3は越中瀬戸椀である。高台は削り出しで、断面を梯形に仕上げている。内面と体部外面に茶色を呈する鉄軸を施しているが一部は黒く発色している。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至る遺跡であるが、調査地区の中ではやや標高が高く、縄文時代と近世の遺物が主体をなしている。なお遺跡は現在、中央部と南部が集落であり、その他は水田として利用されている。

(2) 下女川新遺跡 (図版15の27) 立山町下女川新

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、白岩川左岸に立地する。標高は約38mを測り、規模は東西約320m、南北約600mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器2片、弥生・古墳時代の壺形土器8片・器種不明2片(計10片)、古代の土師器甕1片・須恵器杯B蓋2片・杯B1片・杯A2片・杯3片・壺2片・甕2片(計13片)、中世の土師器皿2片・珠網甕1片(計3片)、近世の越中瀬戸椀4片・皿3片・壺1片・伊万里系染付椀1片(計9片)、総計37片である。これらのうち3点を図示した(図版9の36~38)。

図版9の36は須恵器杯B蓋である。口縁部が屈曲し端部を丸く収める。色調は灰青色を呈する。内面は回転撫で調整、頂部外面に糸切り、頂部と口縁部の境に範削り調整を施す。9世紀後半のものである。

37は須恵器杯B身である。復原口径は約17cmを測る。口縁部はやや外反する。色調は内面が灰青色、外面が暗灰青色を呈する。内外面とも回転撫で調整を施している。9世紀頃のものである。

38は越中瀬戸の皿である。高台を基筒底状に削り出す。色調は赤褐色を呈する。内外面に回転範削り調整を施す。輪轔回転方向は右通りである。

以上、本遺跡は縄文時代から近世に至るまで若干量ずつの遺物を採集できる。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(20) 野町遺跡 (図版15の28) 立山町野町

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、柄津川の右岸と左岸にまたがって立地する。標高は約54mを測り、規模は東西約220m、南北約180mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器19片、弥生～古墳時代の土器5片、古代の土師器2片、中世の土師器皿2片、近世の越中瀬戸碗2片・皿3片・壺3片・伊万里系染付1片(計9片)、総計37片であり、このうち1点を図示した(図版10の4)。

図版10の4は土師器高杯の脚部である。軸部がややふくらむ。色調は赤褐色を呈し、胎土に石英粒を含んでいる。外面には縱方向の磨き調整を施す。古墳時代前期のものである。

以上、本遺跡は調査地区内では最も標高が高く、縄文時代を中心として、若干量の近世に至るまでの遺物を採集できる。なお遺跡は現在東南の一部にライスセンターが建てられているがその他は水田として利用されている。

(長谷川健一)

(21) 野口新亀沢遺跡 (図版15の29) 立山町野口字新亀沢

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、辻坂の上遺跡の南約150mの地点に立地する。標高は約40mを測り、規模は東西約200m、南北約300mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文土器1片、弥生～古墳時代の土器13片、古代の土師器10片・須恵器杯A1片・杯B身1片・壺6片・甕1片(計19片)、中世の土師器皿1片、近世の越中瀬戸皿1片・壺1片(計2片)、総計36片である。これらのうち2点を図示した(図版8の34・35)。

34は須恵器杯B身である。胎土は黒色粒・白色粒を含む。色調は暗灰青色を呈する。内外面は回転撫で調整を施し、焼成は良好で堅緻である。8世紀頃のものであろう。

35は土師器長甕の口縁部片である。色調は淡黄褐色を呈し、口縁端部が屈曲、肥厚し、外面に沈線をもつ。調整は不明である。9～10世紀のものであろう。

以上、本遺跡は弥生～古墳時代を中心とする縄文時代から近世・近代にわたる遺跡と考える。なお遺跡は現在ほとんどが水田として利用されており、一部宅地となっている。(山本慎子)

(30) 大祖里神社前遺跡 (図版15の30) 立山町宮成

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、寺田川をまたいで立地する。標高は約53mを測り、規模は東西約200m、南北約250mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器1片、弥生～古墳時代の土師器27片・須恵器1片(計28片)、古代の須恵器1片、中世の土師器皿1片、近世の越中瀬戸皿1片・香炉1片・伊万里系染付椀1片(計3片)、総計34片であり、このうち2点を図示した(図版10の5・6)。

図版10の5は縄文土器である。外面に半隆起線を横走させ、その上にL R縄文を施す。色調は明褐色を呈する。時期は不明である。

6は須恵器杯身である。復原口径は約14.4cmを測る。受部は外上方向に伸び先端はやや丸味を持つ。色調は黄灰色を呈し、内面と口縁部外面・体部外面の上3分の1は回転施で調整、下3分の2は回転施削り調整を施す。軸回転方向は右廻りである。陶邑TK10型式に比定でき、6世紀中頃のものであろう。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代までの遺物が散布するが、調査区の標高が高い遺跡には珍らしく弥生～古墳時代の遺物が主体をなす。また常願寺川扇状地扇端部の遺跡において6世紀の資料を採集できたのは現在までのところ本遺跡のみである。なお遺跡は現在、中心やや西により大祖里神社と光運寺が存在するが、その他は水田として利用されている。

(31) その他

遺跡として設定した地区外の採集品である(図版8の37、9の39～41、10の7・8・11～18)。

図版8の37は第8ハ地区で採集した有段口縁壺形土器の口縁部破片である。色調は暗青灰色を呈し、外面に刷毛目痕を残す。古墳時代前期頃のものであろう。

図版9の39は第14ハ地区で採集した越中瀬戸の灰釉皿である。復原口径は約11cmを測る。断面三角形の高台を有し、底部内面に菊花文を押捺する。色調は赤褐色を呈し、口縁部内外面に灰釉を施す。内外面に回転施削り調整を施し、軸回転方向は右廻りである。

図版9の40・41は第14ニ地区で採集したものである。40は越中瀬戸碗である。復原口径は約12cmを測る。内外面に黒色に発色する鉄釉を施す。高台を有するものであろう。

41は越中瀬戸の管状陶錐である。長さ約3.6cm、復原口径約1.6cm、復原外径約4cmを測る。内外面に茶褐色を発色する鉄釉を施す。約3分の1が残存する。

図版10の7・8は第16ニ地区で採集したものである。7は深鉢の胴部破片である。半隆起線により区画をつくり、区画内に三爻状文を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期中葉天神山式に属するものである。

8は越中瀬戸すり鉢である。復原口径約30cmを測る。口縁端部は水平の面をなす。内面に6条のおろし目をつけ、内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。口縁部内外面と外面に回転施で調整を施す。

図版10の11は第17ロ地区で採集した須恵器杯B蓋である。口縁端部を下方に弱くつまみ出し

断面を三角形にしている。色調は淡灰青色を呈し、口縁部に自然釉がかかっている。内外面に回転撫で調整を施す。9世紀頃のものである。

図版10の12・13は第17ヘ地区で採集したものである。12は瓦器火舎の口縁部である。口縁端部は水平のやや丸味を持つ面をなす。色調は内面が黒色、外面が灰白色を呈する。中世後期のものである。

13は越中瀬戸Ⅲである。復原口径は約15cmを測る。口縁部内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。内外面に回転撫で調整を施す。

図版10の14は第18ロ地区で採集した越中瀬戸の無釉管状陶錐である。長さ4.6cm、復原孔径約2.2cm、復原外径約4cmを測り、重さは17.6gである。約3分の1が残存する。

図版10の15は第14イ地区で採集した珠洲壺ないし壺の口縁部破片である。「く」字状に外反し、端部はわずかに外方に肥厚する。色調は淡灰青色を呈し、胎土に白色粒を含む。口縁内外面に回転撫で調整を施し、肩上部外面に平行叩き、内面に當て具痕を残す。輪轍回転方向は右廻りである。珠洲Ⅲ期（13世紀後半頃）のものであろう。

図版10の16～18は調査地区外の二ッ塚付近で採集したものである。16は縄文土器深鉢の胴部破片である。横位のL R 縄文を施す。内部に炭化物の付着がみられる。色調は淡黄褐色を呈し、時期は不明である。

17は縄文土器深鉢の胴部破片である。縱位の撚糸文を施す。内部に炭化物の付着がみられる。色調は暗赤褐色を呈する。時期は不明である。

18は浅鉢の口縁部破片である。復原口径は約20cmである。口縁部はほぼ垂直にたちあがり、口唇直下に棒状工具による沈線が横走する。頸部に貼り付け隆帯による渦巻文をもつ。渦巻間には沈線で方形区画をつくり、区画内は櫛状工具により刺突し擬縄文を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期中葉頃のものであろう。
（長谷川健一）

2 遺物の散布状態（第6～10図）

1988年度の調査によって、Ⅳ地区から2517片・口縁部31.0個体分の資料を採集した。これらは縄文時代から近世に至るものであり、このうちある程度、年代を判定できた資料は、2311片・口縁部31.0個体分である。当地区は昨年調査をおこなったⅢ地区と同様に常願寺川扇状地崩端部にあたり、採集資料の構成も相似たところが多い。ただしⅣ地区は遺跡集中地帯である上段丘北半部に接し、柄津川・白岩川が複合扇状地を形成しているところから、若干の相違点も生じている。まず時期別にこれらの採集品の構成と散布状態とについて示そう。

（1）縄文時代の遺物の散布状態（第6図）

縄文時代の遺物は、土器340片・0.2個体分、石器1点、磨製石斧1点、総計342片・2.2個体分であり、そのほとんどが中期初め～晩期に属している。これらの資料は扇状地に広く散布するが、縄文遺跡の多い上段丘に接する地帯においては、柄津川と白岩川に挟まれた部分に密

に散布している。特に13ホ・13チ・16ホ地区に広がる高原下大門遺跡では177片と多くの遺物を採集できた。これらの遺跡は上段段丘の縄文遺跡と一連のものとして把握できるであろう。それに対して、段丘から離れた西側の調査地区では、縄文時代の遺物はより分散的に散布している。またこれらの地区では柄津川より高位の地区におもに散布する。なお柄津川と白岩川に挟まれた地区では、標高約35m以上の地区に縄文時代遺物の散布が多いという結果を得た。

なお調査地区的西南隅に縄文時代遺物が少量散布する地点は、標高約50mと、一段高い扇状地部分の端の地区にある。

(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態（第7図）

弥生・古墳時代の遺物は、弥生土器・土師器434片・1.1個体分(甕26片・0.8個体分、壺8片・0.1個体分、高杯3片、器種不明397片・0.2個体分)、須恵器杯身1片・0.1個体分、総計435片・1.2個体分を採集した。これらは弥生中期初めから古墳時代後期に至るものであるが、大多数は弥生後期以後のものである。

これらの遺物の散布状態を縄文時代と比較するならば、より低地に及んでいることが判る。また散布の中心をなす3ニ地区の浦田遺跡は標高約15m、9イ・ロ地区の辻遺跡は標高約20m余であり、中核的な集落そのものが上段段丘から離れて低位の湧水地帯に立地するようになった。この動きは、中位・高位段丘の縄文遺跡が放棄されることと表裏の関係をなしている。

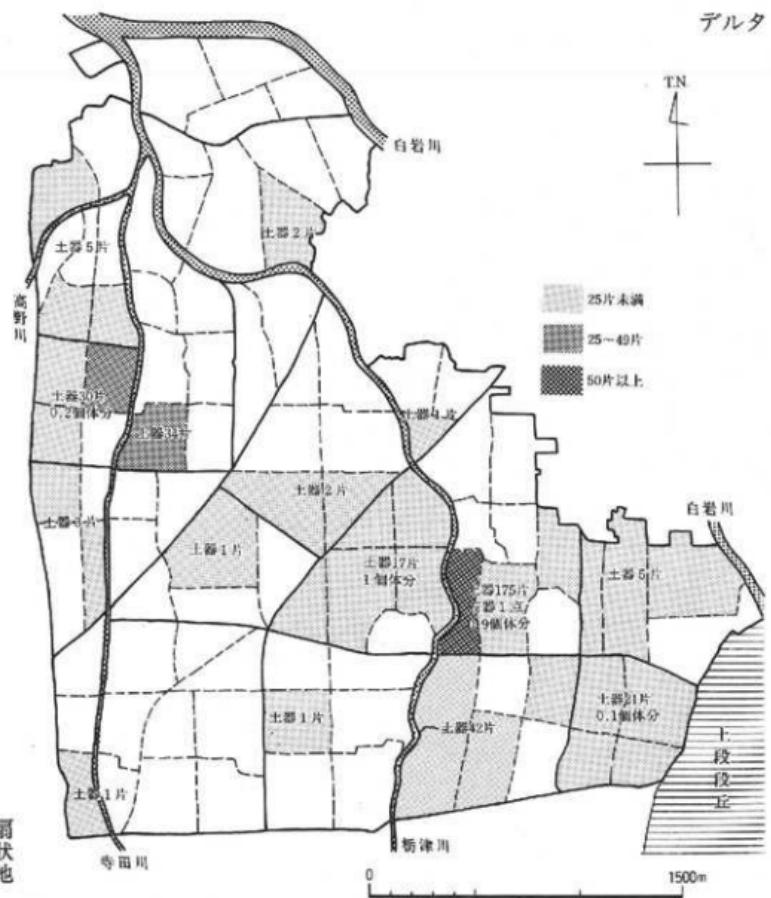
なおⅢ地区においては確実な6世紀の資料を採集できなかったが、今回は18ヲ地区から若干の資料を得た。ただしこの地区は、上段段丘に匹敵する標高約50mの地点であり、扇端部におけるこの時期の集落の存否は不明である。発掘調査によって若干の資料が出土したとの報告もあり、集落が全く途絶していたとは言えないが、衰退傾向にあった可能性が高いであろう。

(3) 古代遺物の散布状態（第8図）

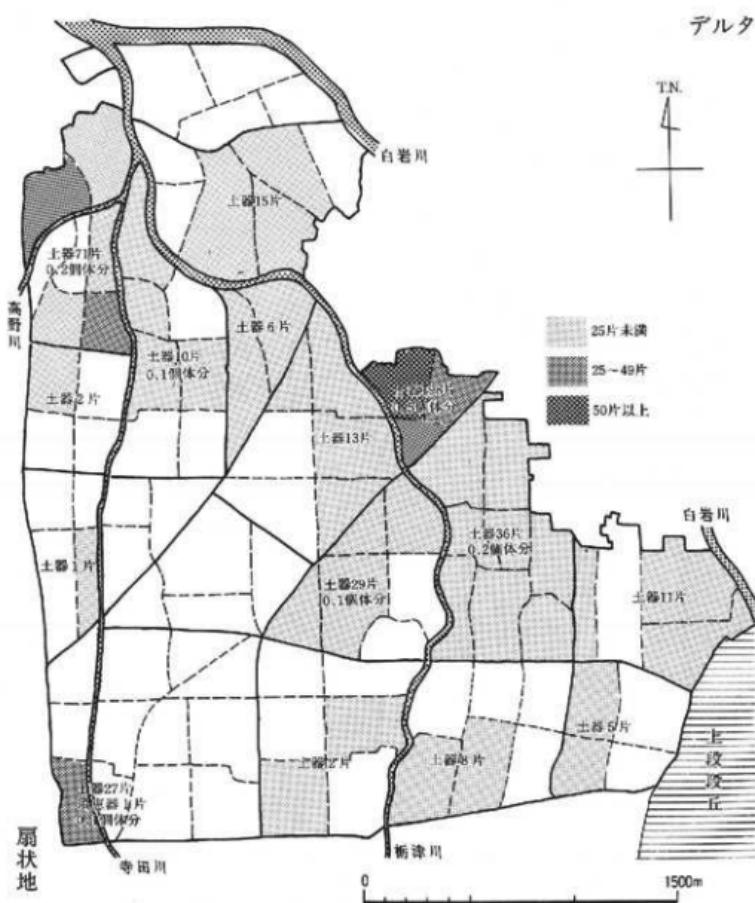
古代の遺物は、土師器121片・0.8個体分(杯A11片・0.1個体分、椀B1片、甕31片・0.6個体分、器種不明78片・0.1個体分)、黒色土器杯9片(杯A2片、器種不明7片)、須恵器264片・3.6個体分(杯B甕41片・1.1個体分、杯B身17片・0.1個体分、杯A13片・0.1個体分、杯B身もしくは杯A67片・1.5個体分、椀A1片、鉢1片、壺58片・0.6個体分、甕58片・0.1個体分、器種不明8片)，総計394片・4.4個体分である。これらのほとんどは8世紀後半から9世紀にかけてのものである。8世紀前半と10世紀以後の資料は少量であり、Ⅲ・Ⅳ地区を通じて確実に7世紀と認定できる資料は得ていない。

これらの資料の散布状態は、弥生・古墳時代には等しく、扇端部に広く散布している。ただし遺物集中地点は、弥生・古墳時代以来の辻・浦田遺跡周辺に加えて、柄津川・白岩川合流点の泉・寺田地区付近と、3箇所になっている。この泉・寺田地区付近は東大寺領大荆荘の比定地であり、第4章で別に検討を加えることにしたい。

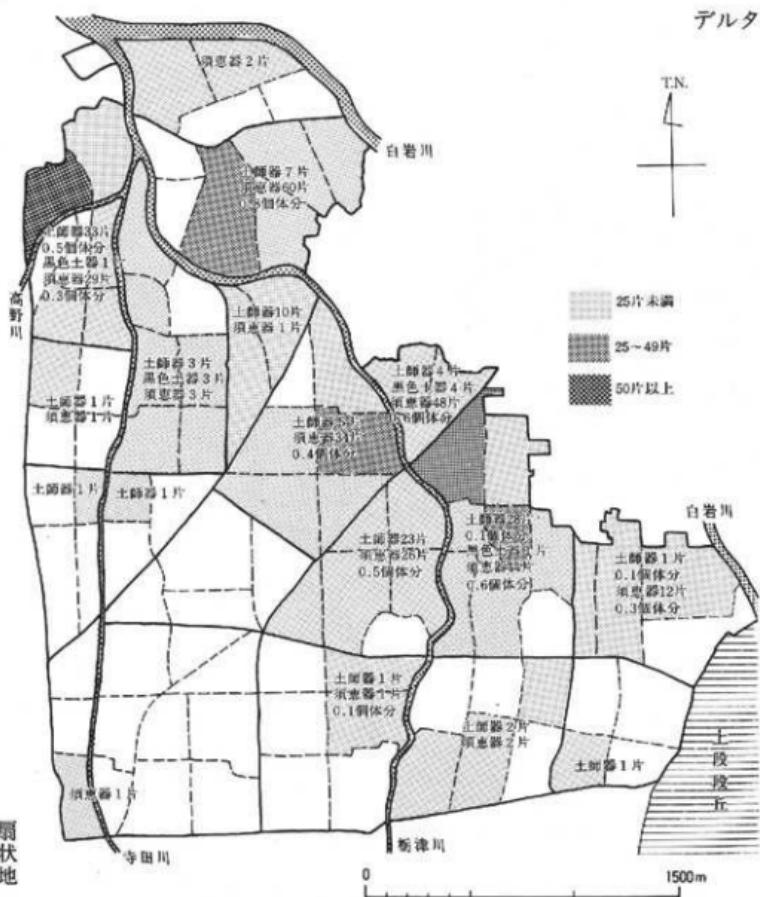
扇端部において、7世紀の遺跡が不明であること、8・9世紀に大遺跡群が形成されること、10世紀以後に集落が拡散したらしいことなどにおいて、Ⅳ地区ではⅢ地区と同様の結果を得た。



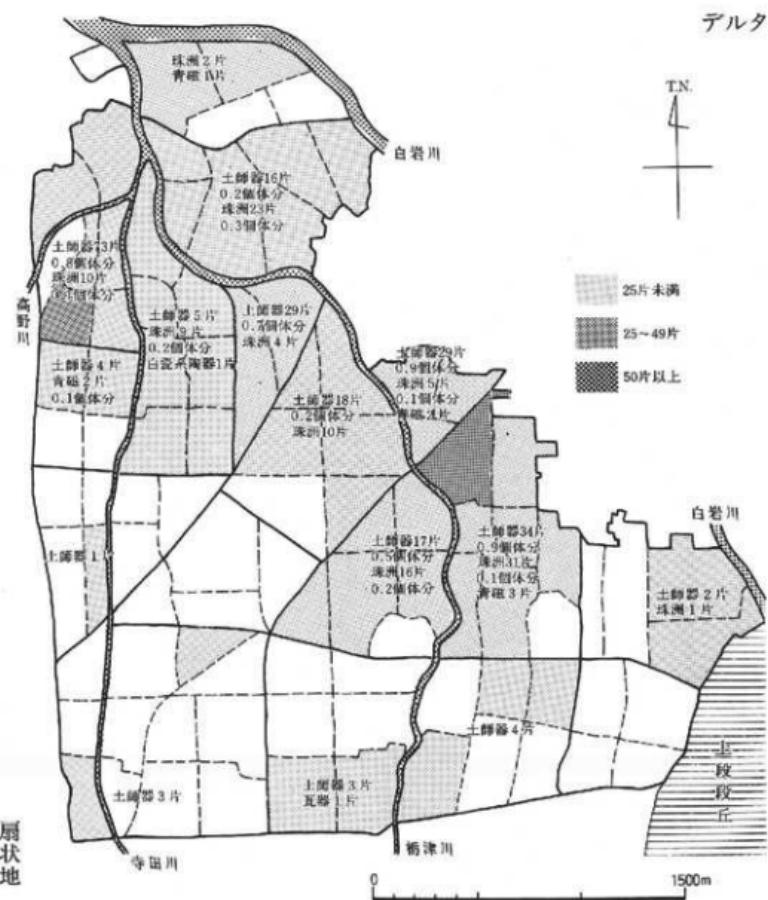
第6図 IV地区縄文時代遺物の散布状態（地区名は第4図参照）



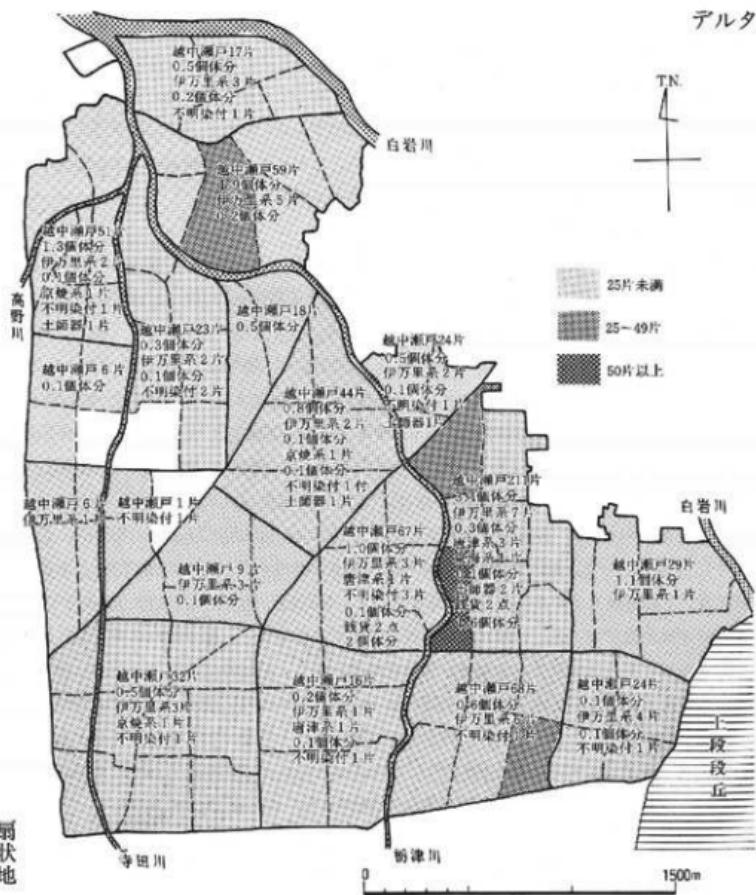
第7図 IV地区弥生・古墳時代遺物の散布状態



第8図 IV地区古代遺物の散布状態



第9図 IV地区中世遺物の散布状態



第10図 IV地区近世遺物の散布状態

(4) 中世遺物の散布状態（第9図）

中世の遺物は、土師器237片・4.3個体分（すべて皿A）、珠洲111片・0.9個体分（すり鉢28片・0.6個体分、壺4片・0.2個体分、甕79片・0.1個体分）、白瓷系甕1片、竜泉窯系青磁9片・0.1個体分、瓦器火舍1片、総計359片・5.3個体分である。これらは中世の全般に及ぶものであるが、16世紀の資料は少ない。

散布状態はⅢ地区と同様に分散的であり、50片以上採集できた小地区はないが、古代と同様に辻・浦田遺跡付近に若干の集中地点がある。これに対して大荊莊北定地の泉・寺田遺跡付近には、遺物が散布するものの少数であることが対照的である。なお16世紀には至近の地に弓庄城が営まれ、当地はしばしば戦乱の場となる。このこととⅣ地区の遺物量の減少が関係する可能性があるが、この点については発掘例の増加をまって判断したい。

(5) 近世遺物の散布状態（第10図）

近世の遺物は、越中瀬戸706片・12.7個体分（灰釉碗14片・0.4個体分、皿20片・1.4個体分、壺3片、香炉5片・0.2個体分、器種不明1片、黒く発色する鉄釉碗111片・1.2個体分、皿5片・0.2個体分、壺5片・0.1個体分、すり鉢1片、蓋1片、香炉1片・0.1個体分、茶色に発色する鉄釉碗28片・0.3個体分、皿132片・3.2個体分、壺34片・0.2個体分、粗製壺149片・2.4個体分、すり鉢50片・0.2個体分、灯明台1片・0.1個体分、管状陶錐4片・1.4個体分、無釉皿1片、粗製甕105片・1.1個体分、管状陶錐1片・0.2個体分、鍔付き環1片・0.1個体分、釉不明碗3片、皿22片、釉及び器種不明8片）、伊万里系染付47片・1.2個体分（碗23片・0.6個体分、皿12片・0.4個体分、器種不明12片・0.2個体分）、産地不明染付12片・0.1個体分（碗6片・0.1個体分、器種不明6片）、京焼系黄釉陶器3片・0.1個体分（灯明台2片・0.1個体分、器種不明1片）、唐津3片・0.1個体分（刷毛手鉢1片、刷毛手器種不明2点・0.1個体分）、美濃系すり鉢1片、土師器型入土製品5片、寛永通宝4点・3.6個体分、総計781片・17.9個体分である。越中瀬戸が破片数で90.9%、口縁部で90.1%を占めて主体をなし、越中瀬戸の中では、黒く発色する鉄釉碗と茶色に発色する鉄釉皿、及び粗製甕が多い。碗は皿に入れて焼成し、皿は直接重ねて焼いたものが主流である。また糸切り痕をもつ粗製の壺は、皿そのものであるが、壺として流通したらしい。このうち無釉の粗製壺には蔵骨器として使用したものがある。なお越中瀬戸生産地の上段段丘では、越中瀬戸がほぼ100%を占めたが、Ⅳ地区では肥前系陶磁が破片数で6.4%、口縁部で9.2%、京焼系陶器が破片数で0.4%、口縁部で0.7%存在した。

これらの資料は調査地区にはほとんどなく散布している点で、以前とかなり様相を異にする。またこれらの中では、柄津川沿いに4個所の集中地点がある。

(6) 遺物の散布について

本調査地区は、(a)低地の扇端部湧水帯(西北部)、(b)上段段丘に接するやや高位の扇端部(東南部)、(c)湧水帯より高位の扇状地部分(西南部)、という3つの部分から成っている。(a)の地区においてはⅢ地区の北部と同様に、弥生時代以来、現代に至るまでの遺跡が多く営まれてい

る。(b)の地区では、より古く縄文時代中期以後、現代に及ぶ遺跡が存在するが、中心的な集落は、縄文時代には(b)の地区、弥生時代～古代には(a)の地区にあり、中・近世では大きな差がない。(c)の地区は、若干の縄文時代遺物が散布した後、遺物の散布は、ごくわずかとなり、近世に至って増加する。

この流れの中での顕著な出来事は、7世紀における集落の衰退、8世紀の大規模な再開発、10世紀以後の遺跡の拡散、近世の大開発である。扇央部の開発も8世紀以後、川筋を中心として進行したと推察するが、近世の遺物散布量の急増は特筆してよいであろう。またIV地区の動きだけではそれほど目立たないが、当地域全体についてみると、弥生時代の開始は遺跡立地の大きな転換期であった。

なお調査地区の西南隅は、一段高い扇状地面の末端にあたり、横を寺田川が流れている。この地区からは、(c)の地区的傾向とは異なり、縄文時代から現代に至る遺物が散布する大祖里神社前遺跡と野町遺跡を発見した。この地点は立山町の中心街区である五百石が位置する扇状地面の末端にあたり、このような遺跡の存在することを予想できなかったところである。

来年度からは、この扇央部の調査にとりかかる予定である。この地区は、従来、遺跡の様相が最も不明確であった地域であり、その開発史を知る手掛かりを得ることに努めたい。

(宇野隆夫)

[注]

- ① 立山町教育委員会『立山町史』上巻、1977年。
- ② 立山町教育委員会『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』立山町文化財調査報告書第3冊、1987年。
- ③ 立山町教育委員会『浦田遺跡第2次発掘調査報告』立山町文化財調査報告書第6冊、1988年。
- ④ 富山県『富山県史』考古編、1972年。
- ⑤ 立山町教育委員会『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』1979年。
- ⑥ 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告 立山町遺構編』1981年。
- ⑦ 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告 立山町土器・石器編』1982年。
- ⑧ 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告 立山町木製品・総括編』1984年。

第3章 北陸における円墳の規模とその意義

田島富慈美

古墳時代の墓制を考えるうえで、前方後円墳とそれよりはるかに数の多い円墳は、最も重要な情報を与えてくれるものである。その規模一つをとりあげても、そこに葬られた人々の社会的地位を考える重要な手掛りとなるのは言うまでもなかろう。

ただしこのような問題を具体的に明らかにするためには、墳形別、時期・地域別に古墳の規模を格付け、それが古墳の他の要素とどのような関係をもつかを検討しなければならない。

本稿は、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室が、立山町浦田稚児塚古墳、同塚越塚越古墳という大・中型円墳の測量調査を実施したことを契機として、北陸古墳時代の円墳の規模とその意義について検討を加えようとするものである。そして前方後円・前方後方墳と円墳との関係にもふれて、北陸における墓制の全体像を探る第一歩としたい。

1 円墳の規模と群別（第11図・第1表）

まず北陸における、直径20m以上の円墳を集め（第1表）。なおここには墳丘裾に小規模な張り出しを持つものを含んでいるが、本稿ではこれらを円墳として扱い、前部基部に匹敵する施設をもつものを帆立貝式古墳と認定している。また墳丘の変形や発掘調査を実施していない古墳の規模をどのように扱うかのような困難な問題もあるが、これらの点に留意しつつ、できる限りの分析を加えたい。

集めた円墳は計146基を数え、これらは規模による群別が可能であると考えられる（第11図）。すなわち円墳の規模の集中度合いに着目すると、Ia群：直径60m以上、Ib群：45m以上60m未満、IIa群：34m以上45m未満、IIb群：20m以上34m未満、と4群に大別できる。このように古墳は規模が小さくなるほど数が増加し、ここではとりあげないが、より多く存在する直径20m未満の古墳をIII群とする。規模についてのみ見るならば、I群が大型（Ia群が特大、Ib群が大型）II群が中型（IIa群が中大型、IIb群が中小型）、そしてIII群が小型となる。

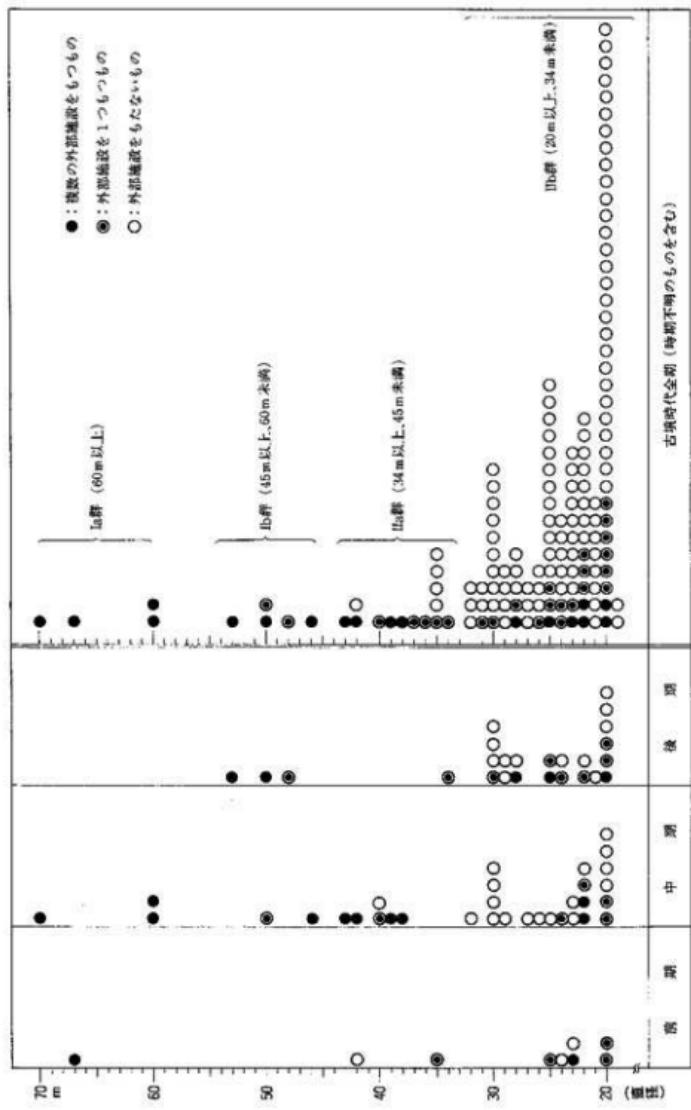
以上の各群について、周溝・段築・葺石・埴輪の樹立という4項目について、それらの有無を検討した（第11図）。その結果、I群の大型円墳は、何らかの外部施設をもち、とくにIa群特大型円墳は、2種以上の外部施設をもつものが揃うことが判った。またII群中型円墳は外部施設をもたないものがかなりあり、IIb群中小型の円墳では外部施設をもたないものが79.7%に達する。またIII群小型円墳は大多数のものが何らの外部施設ももたないであろう。

第1表 北陸古墳時代の山積一覧

番号	古墳名	直径(m)	高さ(m)	地	周囲	出土遺物	時期	測量の時期・年	注	所在地
(総 中)										
1	開野2号墳	29.5	3.2	丘陵先端	樹木	木頭骨	5.5m半	先祖	1986 32	小矢留作石城
2	B中塙古墳	29	3.8	段丘上	樹木	圓穴式石室	中房	先祖	1964 24-31	中塙立山町立山町H中
	圓穴式石室A	25.0	-	丘陵端	樹木	石器	5cm半	先祖	1951 31	鳥取県佐伯郡浮穴字浮穴
4	山下古墳(北側)内筒	25.0	-	丘陵端	樹木	骨(?)	6cm	先祖	1971 31	射水郡立山町見尻坂
5	柳原古墳	46.2	7.3	丘陵端	樹木	骨(?)	7	測量	1988 26-31	射水郡立山町見尻坂
6	大塚古墳	35	5~6	丘陵端	樹木	骨(?)	7	測量	1987 26-29	射水郡立山町見尻坂
7	坂越古墳	35	4	丘陵端	樹木	骨(?)	7	測量	1982 35-54	小矢留市山越
8	秀賀古墳	30.0	5.2	丘陵端	樹木	骨(?)	7	分派 勘定	1971 10	小矢留市山越
9	オナノツ古墳	27.5	4.0	丘陵端	樹木	骨(?)	7	分派 勘定	1960 31	富山市立山町
10	矢川上野1号墳	27.0	2	河岸段丘上	樹木	木頭骨	7	測量	1960 31	富山市立山町
11	扇谷1号墳	24.0~25.0	1	丘陵端	樹木	骨(?)	7	分派	1979 10	小矢留市佐原ヶ谷
12	扇谷2号墳	25.0	4.0	丘陵端	樹木	骨(?)	7	分派	1979 10	小矢留市佐原ヶ谷
13	杉谷後原古墳	25	2.5	丘陵上	樹木	骨(?)	7	測量	1974 44	高山市秋津
14	石越古墳(北側)	22~26	2.5	丘陵尾根	樹木	骨(?)	7	分派 勘定	1985 26	高山市石越松代
15	飛谷古墳	20.0	2.0	丘陵尾根	樹木	骨(?)	7	分派	1979 10-35	小矢留市飛谷
16	飛谷2号墳	20.0	2.0	丘陵尾根	樹木	骨(?)	7	分派	1979 10-35	小矢留市飛谷
17	所原尾根古墳	20.0	3.0	丘陵尾根	樹木	骨(?)	7	分派	1979 10	小矢留市所原ヶ谷
(前 小)										
18	中塙五塚1号	67(75歳貫?)	14.5	丘陵側面の谷底	鐵玉・鐵石	4.5m	測量	1929 12	高島郡魚住町	
19	テンシクイ1号	23~27	5.8	丘陵側面	鐵玉・石	4.5m	測量	1977 7	高島郡西日高町	
20	芝頭山1号墳	21.5	2~2.5	丘陵正端	鐵玉	5cm半	本測定	1970 36	北安曇郡上高地町	
21	北大原山古墳	670	?	高岸段丘上	鐵玉	5cm半	本測定	1970 36	北安曇郡上高地町	
22	赤木上野古墳	38	5.5	丘陵側面谷底上	鐵玉	5cm半	本測定	1964 37	北安曇郡木崎村余本	
23	扇谷古墳	450	1	海原段丘下端	鐵玉	5cm半	本測定	1962 15-36	北安曇郡木崎村	
24	矢田丸山古墳	24	7.5	細長谷底谷	鐵玉	5cm半	本測定	1969 34	七尾市立山町	
25	芝頭山古墳	43	3.5	海原段丘上	鐵玉・鐵石	5cm半	本測定	1970 36	北安曇郡上高地町	
26	木野原古墳	620	2.0	丘陵段丘上	鐵玉	5cm半	本測定	1972 4	北安曇郡上高地町	
27	河原二・三・四号墳	38.9	6.5	丘陵尾根	鐵玉	5cm半	本測定	1973 4	北安曇郡上高地町	
28	ノ山古墳	42~32(復元?)	6	丘陵段丘上	鐵玉	5cm半	本測定	1970 36	北安曇郡木崎村	
29	海原古墳	25(復元?)	7	海原段丘上	鐵玉	5cm半	本測定	1970 15-36	北安曇郡木崎村	
30	海原古墳	20	2.5	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1970 15-36	北安曇郡木崎村	
31	利引古墳	20	3.5	丘陵地上	鐵玉	6cm半	本測定	1972 4	北安曇郡木崎村	
32	糸田金谷古墳	18.5~21	3.5	盆地地上	鐵玉	6cm半	本測定	1973 4	北安曇郡木崎村	
33	安部郡東山古墳	約50(復元?)	5	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1977 7	北安曇郡木崎村	
34	矢田中野古墳	29	3.2	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1977 7	北安曇郡木崎村	
35	新宮丸山古墳	620	3	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1979 5	北安曇郡木崎村	
36	河原二・三・四号墳	36.7	5.1	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1979 5	北安曇郡木崎村	
37	コト木4号墳	35	3~5.5	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1977 7	北安曇郡木崎村	
38	テンシクイ4号墳	35	6	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1977 7	北安曇郡木崎村	
39	テンシクイ5号墳	29~32	5	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1977 17	北安曇郡木崎村	
40	西高島古墳(山形)	27~34	1~5.0	丘陵正端	鐵玉	6cm半	本測定	1985 7	北安曇郡木崎村	
41	東高島古墳(山形)	27.5	1	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1979 5	北安曇郡木崎村	
42	島川丸山古墳A~D号墳	25~31.0	2.5~4.0	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1982 16	高岡市立山町魚川	
43	神田1・2号墳	25	?	丘陵上	鐵玉	6cm半	本測定	1959 36	高岡市立山町魚川	
44	大船山古墳	35(復元?)	?	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1976 1	高岡市立山町木坂・大坂	
45	美富山古墳(復元?)	20~30(復元?)	?	平地	鐵玉	6cm半	本測定	1977 17	高岡市立山町能登高上	
46	氣の呑み古墳(復元?)	23~25	2.5	丘陵段丘	鐵玉	6cm半	本測定	1985 17	高岡市立山町能登高上	
47	高岡市立山町A~E号墳	24.0	5.0	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1982 16	高岡市立山町魚川	
48	西ノ原1号墳	20~25	6	丘陵段丘上	鐵玉	6cm半	本測定	1972 50-52	輪島市金谷	

第1表のつづき

番号	古墳名	延径(m)	高さ(m)	西壁	段差	通路	土体	埴	外土通路	時期	調査の種類	年	所在
49	貝川山古墳(人・寺跡)	27.0-18.0	6.0	正規壁根周界	?	?	?	?	?	?	分譲地	1982	16
50	水神古墳	22	2.5	施立柱根部	?	?	?	?	?	?	分譲地	1975	1
51	大隅日向山古墳	22.0	5.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1976	1
S2	他社近隣追跡古墳	22	3	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	7
53	河内三ツ山古墳	21.0	1.2	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1985	17
54	河内三ツ山古墳群A-7号墳	21	3.5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1979	5
55	貝川山古墳群A-7号墳	13.0-21.0(推定)	2-4	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1982	16
56	金谷古墳	約20	2	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1979	5
57	金谷古墳	約20	2	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1976	1
58	西田山古墳(群)C群No.26号墳	20.0	2.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1985	17
59	西田山古墳(群)E	20	1	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1979	6
60	伏戸古墳	約20	約3	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1976	1
61	伏戸古墳	約20.0	2.5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	未調査	1976	1
62	伏戸古墳	約20	?	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	未調査	34	?
[調]													
63	磐梯平野山古墳	20.0(推定)	?	正規斜面	?	?	?	?	?	?	試験	1983	11
64	野田山三向山古墳	42	2-3	丘陵	?	?	?	?	?	?	測量	1978	3
65	荒富山古墳	35	1.5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1982	18
66	小伏戸古墳	23.3-25	4-5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1969	53
67	和田山1号墳	18.5-20.5	2.7	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1979	30
68	和田山1号墳 65-50(60)号?	65-50(60)号?	8.5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
69	和田山2号墳	22	3	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	測量	1977	30
70	和田山3号墳	28	4.5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1979	30
71	和田山4号墳	24	5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	30
72	和田山5号墳	33.5	5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	30
73	月夜森古墳	28.0	5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
74	松山古墳	36.0	4.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
75	五代山古墳	32	?	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3-51
76	おまる山古墳	約30.5	6.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
77	御所ハツ古山古墳	約27	4	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
78	分枝ハツ古山古墳	25.0	4.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
79	神谷内山古墳	25	4	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
80	御所ハツ古山古墳	25	4	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
81	河田山古墳	27-28	1.8	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
82	おまる山古墳	22-24	5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	13
83	敷地寺古墳	22-25	2.5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3-51
84	敷地寺古墳	22.5	3.0-4.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
85	小字敷地寺古墳	22.0	6.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
86	吸坂古墳群(?)	21.7	1.3	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
87	吸坂古墳群(?)	21.5	3.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
88	吸坂古墳群(?)	18.5-22.5	3.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
89	三ツ町A古墳群3号墳	21.0	3.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
90	三谷F古墳	21.0	4.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1985	14
91	米丸山古墳	約20	約2.7	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
92	御所ハツ古山古墳	約20(60尺?)	4	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
93	御所ハツ古山古墳	約20	4	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
94	十斗原古墳	20	5	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3
95	十斗原古墳	20	3	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
96	野瀬古墳	20	5.0	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1977	2
97	野瀬古墳	20	3	丘陵地盤上	?	?	?	?	?	?	分譲地	1978	3



第11図 手跡における凹墳の規模と外部輪郭（周溝、段築、葺石、埴輪）

外部施設の種類については全体の中で周溝を備えるものが19.2%とやや多いのに対し、段築・葺石・埴輪は7~8%台と低い。これをIa群~IIb群の群別でみると、Ia群が周溝・段築・葺石各75%，埴輪25%，Ib群が周溝60%，段築・埴輪各40%，葺石20%，IIa群は埴輪35.7%，周溝・葺石各28.6%，段築7.1%，IIb群は周溝14.6%，段築・葺石・埴輪各4.1%である。Ia群~IIa群まではある程度外部施設を備えているが、IIb群では周溝を除いてはほとんど外部施設がみられなくなっている。なおこれら4項目の外部施設を全て備える円墳は北陸では確認できない。3項目備えるものについては、石川県鹿島郡小田中親王塚古墳、同羽咋市滝大塚古墳、同滝6号墳、同柴垣觀音山古墳がある(第1表)。以上のことから北陸では外部施設の整う円墳は数少なく、かつその分布は能登に多いという傾向をうかがえる。

このように規模から抽出した群別は、外部施設の在り方の違いとかなり密接な関係があり、一定の意味をもつと考える。なお墳丘の高さ、埋葬施設、副葬品についても同様の分析が必要であるのは勿論であるが、III群小型円墳も含めて別稿で検討したい。

2 時期・地域別の規模(第12~13図)

前項で、北陸古墳時代の円墳を一括して群別したが、それは時期・地域別の特色を記述するのに際して、その前に北陸全体の概観が先ず必要と考えたからである。その上でここでは全体の年代的な変化をみた後に地域毎の様相を検討することにしよう。

古墳時代前期には、直径20m以上の大・中型円墳は数が少なく、特にIa群特大型円墳は直径67mの石川県鹿島郡小田中親王塚古墳が知られるのみである。この古墳からは、日本海岸における三角縁神獸鏡分布の東限となる三神三獸鏡が出土して、その独特の地位を物語っている。

中期には、大・中型円墳の築造数が急激に増し、時期の判るI群大型円墳のうち6割は中期に属している。特にIa群特大型円墳についてみると前期の一例を除いて、すべてこの時期のものである。またIIa群中大型の円墳も7割が中期に築造されている。

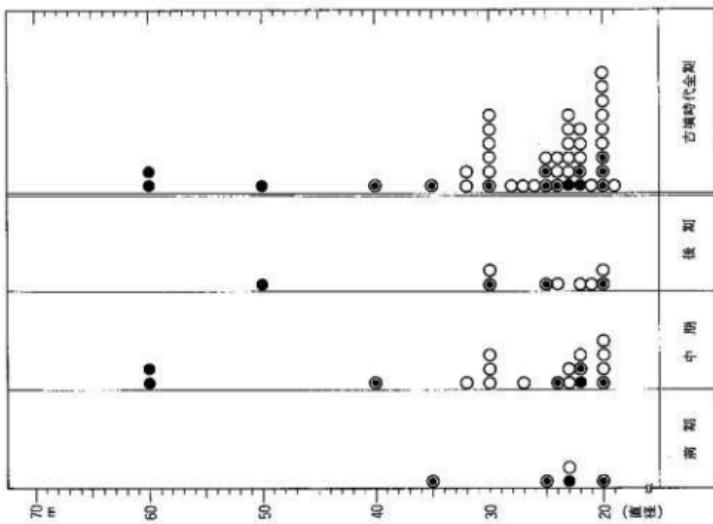
後期には、I群大型円墳の築造数が減少し、かつIa群特大型円墳は知られていない。またII群中型円墳も増加しているとはいせず、IIa群中大型の円墳が減少した。他方これと較べてIII群小型円墳が著しく増加し、中期までとは異なる様相が生じてきている。

次にこれらの点について、旧国別に検討を加えることにしよう。

若狭・越前：若狭7・越前37古墳をとりあげる(第12図左)。Ia群特大型円墳は両者に1基ずつあり、Ib群大型円墳は3基確認できる。時期別にみると、北陸全体と同じく前期に少數の円墳を築き、中期には大規模なものが築造されて数が増す。また後期には全体的に規模が縮小してその数も減少していく。次に外部施設についてみると、複数の外部施設を持つものは全体の約1割、単数のものは約2割を占める。またI群は全て複数の外部施設を持つが、II群は外部施設を持つものが約3割である。

加賀：計40基を確認し得る(第12図左)。Ia群特大型円墳はみあたらず、Ib群大型円墳1

若狭・越前



加賀

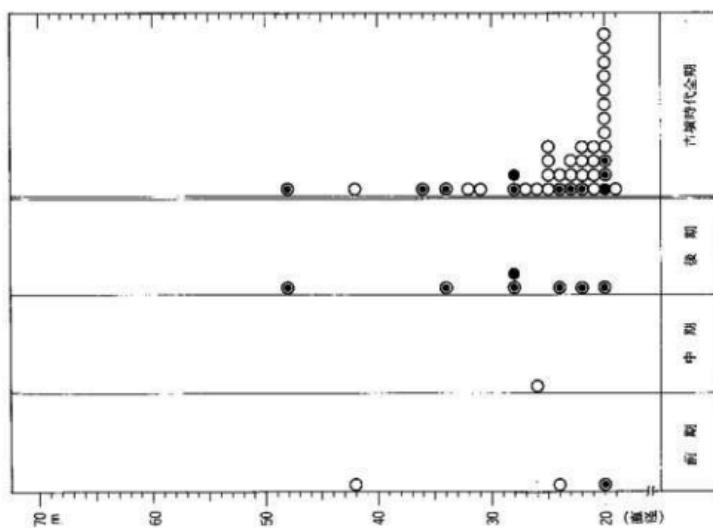


図12 図 若狭・越前・加賀の円墳の規模と外部施設

第13図 施登・越中の円墳の規模と外部施設

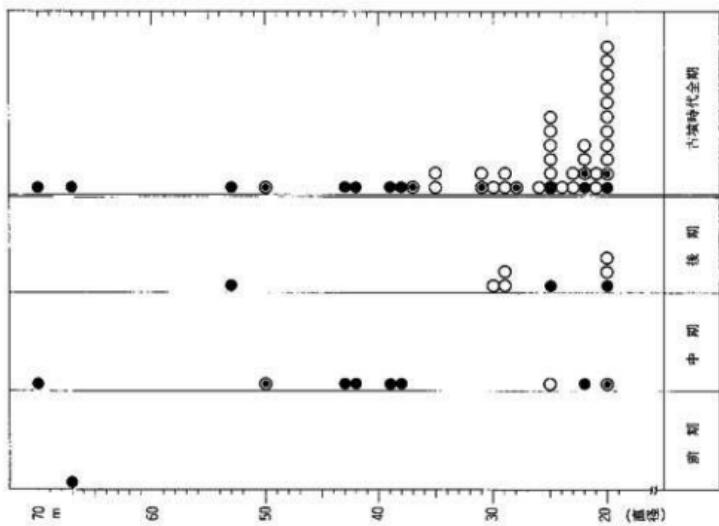
疊能

古墳時代全期

後期

中期

前期



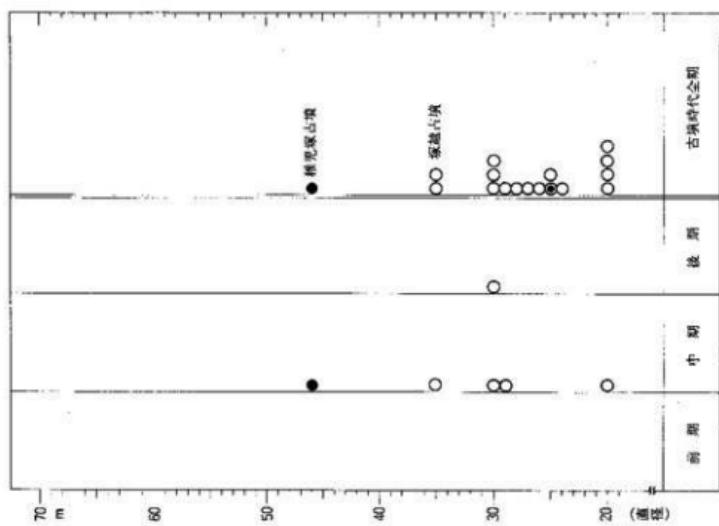
中

古墳時代全期

後期

中期

前期



基、Ⅱ群中型円墳39基である。時期については不明のものが多いが前期から中期に築造数が減少し、なかでも大規模な円墳は前期と後期に築造されている。外部施設についても不明なものが多いが、最大規模の宮塚丸山古墳は唯一埴輪を備え、Ⅱ群は周溝を備えるものが多い。

能登：計44基をとりあげる（第13図右）。その内容はⅠa群特大型円墳2基、Ⅰb群大型円墳2基、Ⅱa群中大型円墳7基、Ⅱb群中小型円墳33基であり、Ⅱa群大型円墳のなかでも大型のものは当地域に多い。時期別にみると、前期にⅠa群特大型円墳が1基築造されてはいるが、全体として中期になるとⅠ群大型円墳、Ⅱa群中大型円墳が増加する。後期にはⅠb群大型円墳1基を除いたⅠ群大型円墳、Ⅱa群中大型円墳も築造されず、Ⅱb群中小型円墳が増加している。外部施設については、複数の外部施設を持つものが全体の約2割、単数が約1割であり、北陸の他地域と比較すると複数の外部施設を備えるものが多く、その傾向は周溝・葺石・埴輪に多くみられる。

越中：現在のところ直径20m以上の円墳は17基確認し得る（第13図左）。このうちⅠa群特大型円墳は確認できず、富山県立山町稚兒塚古墳が最大、同塚越古墳は2番目の規模である。時期については不明のものが多いが、大・中型の円墳はおもに中期に築造されるようである。後期の様相についてはまだ充分な資料が得られていない。同じく外部施設もほとんどが不明であるが、稚兒塚古墳が複数の外部施設を持つ唯一の古墳である。

このように北陸の直径20m以上の円墳を、時期・規模・外部施設の点から地域別に比較・検討してきたが以下でこれらの点についてまとめておきたい。

今回北陸における直径20m以上の円墳146基をとりあげた。これらを地域ごとに比較するとⅠa群特大型円墳は分布が能登に2基、若狭・越前に各1基となり限られており、規模も他と比較して特に突出していることが判った。これらは前期の一例を除いて中期に築かれている。またⅠb群大型円墳は北陸全体に分布するが、Ⅰa群特大型円墳を確認できない越中・加賀においては最大規模のものとなる。そして若狭・越前・能登においてもこれらはⅠa群特大型円墳に次ぐグループをなすことを確認し得る。またⅠb群大型円墳は中・後期に築かれているが、後期にはこれが最大の円墳となっている。Ⅱ群中型円墳は北陸各地で築造されるが、なかでも規模が大きく外部施設の整ったものは能登に多いといえる。後期においてⅡa群中大型円墳が減少し、Ⅱb群中小型円墳が主となることは、Ⅰa群特大型円墳とⅠb群大型円墳の関係と一致し、Ⅰ群とⅡ群の大別に意味のあることを示していると考える。

3 前方後円・前方後方墳と円墳

次に北陸の前方後円・前方後方墳の変遷を地域ごとに概観し、円墳の変化と対比したい。

若狭・越前：若狭では確実な前期の前方後円墳は確認されていないが、三角縁神獣鏡が2例出土している。中期に入ると、福井県上中町上之塚古墳（全長90m余、周溝・段築・葺石・埴輪を備える）などの大型前方後円墳が築造され、中期後半から後期にかけては大型前方後円墳

の築造がみられるが後期前半には築造されなくなる。越前では古墳時代前期には福井県福井市安保山1号墳(全長約32m⁹)、同2号墳(全長約34m⁹)が築造されるが、これらは外部施設を有していない。前期後半には福井県松岡町手操ヶ城山古墳(全長約110m⁹、段築・葺石・埴輪を備える)が築造され、その後も越前では北陸最大級の前方後円墳が継続して築造されている。これらの古墳は外部施設も無い、畿内色の濃いものが多い。後期に入るとその規模は縮小し、福井県金津町神奈備山古墳(全長約74m⁹)を最後に築造を終える。

加賀：現在のところ古墳時代前期の確実な大型前方後円墳は確認されていないが、石川県加賀市吸坂D-13号墳(全長68.3m⁹)、大型前方後方墳では同吸坂A-3号墳(全長61.0m⁹)にその可能性があることを田嶋明人氏に教示いただいた。中期になると石川県寺井町秋常茶臼山1号墳(全長約105m⁹、葺石を備える)が加賀南部で、北部では同金沢市長坂二子塚古墳(全長54m⁹、埴輪をもつ)が築造される。その後、中期後半から後期にかけて各地で前方後円墳が築造されるが、後期前半には一部の地域を除いて築造を終える。

能登：古墳時代前期初頭から前方後方墳の築造が盛んであり、特に邑知地溝帯を中心として石川県鹿西町雨の宮1号墳(全長約70m⁹、段築・葺石を有する)のような大型のものが知られている。前方後方墳は中期に同島屋町川田ソウ山1号墳(全長45m⁹)が築造されるが、その後は姿を消す。

一方、大型の前方後円墳は雨の宮1号墳と同時期頃と考え得る石川県鹿西町雨の宮2号墳(全長約70m⁹、段築・葺石を備える)の築造が最初であり、その後前方後円墳は一たん築造されなくなるが中期後半から能登の各所で多く築造され、後期中頃にはその築造を終える。

越中：前方後円・前方後方墳の確認数は北陸の中では少なく、その規模も小さい。古墳時代前期には、前方後円墳は富山県小矢部市谷内16号墳(全長約47m⁹)、同関野1号墳(全長約65m⁹、段築を備える)、同高岡市桜谷1号墳(全長約62m⁹)、同婦中町勤使塚古墳(全長75m⁹、段築を備える)がある。前方後方墳では同婦中町王塚古墳(全長約62m⁹)があり、これらは越中最大級のものである。しかし中期に入ると、前方後円・前方後方墳の築造は目立たなくなり、前方後円墳の富山県富山市古沢塚山古墳(全長約41m⁹)がその可能性を持つものとして挙げ得るのみである。中期末～後期初頭の頃再び同小矢部市若宮古墳(全長約48m⁹、埴輪を備える)、同水見市朝日長山古墳(全長約43m⁹、埴輪を備える)といった前方後円墳が築造される。

以上の前方後円・前方後方墳の変遷をまとめると、次のようになるであろう。

古墳時代前期には、北陸において広く前方後円・前方後方墳を築くが、その中でも、能登に古くから規模の大きなものが存在し、越中にも最古期から本格的な前方後円墳が築造される。

中期には、若狭・越前・加賀南部において、前期よりも巨大な前方後円墳を築造する一方で、能登・越中においては、前方後円墳は減少を見る。この2地域では中期の終りになって、再び前方後円墳を築造した。

後期に至ると、北陸各地を通じて前方後円墳は小型化して減少し、後期後半(6世紀後半)

にはその築造を停止したらしい。

本稿で検討した円墳の動向と、前方後円・前方後方墳の変化の関係は、以下のように理解したい。

北陸において、前期から中期にかけて、若狭・越前では継続して前方後円墳と大・中型円墳を営むが、加賀と能登・越中は対照的な歩みをたどる。能登・越中においては、中期になると、前方後円・前方後方墳が衰退する一方で、大・中型円墳が増加する。逆に加賀においては、中期に前方後円墳を多数築造し、大・中型円墳は目立たない。

中期末の変化（能登・越中における前方後円墳の復活）をへて後期に至ると、北陸を通じて前方後円墳の築造が少なくなっていく。そして、I群大型円墳、II群中型円墳に加えて、多数のIII群小型円墳が築かれた。またI群、II群ともに、その中に大小の別があったものが、Ib群大型円墳と、IIb群中小型円墳に整理されてくることに注目したい。その結果、大・中・小型円墳の規模の差がより明確に表現されるようになってきた。この段階では格差の表現が前方後円墳と円墳ではなく、円墳の規模の差に重点を移してきたように見える。

結　　び

古墳の築造には多大な労働力を必要とするため、古墳の規模がそこに葬られた人、あるいはその後繼者の方や社会的地位を表わしていることは疑えない。ただしこの点を具体的に明らかにするためには、時期・地域毎に、墓制の全体像を把握しなければならないであろう。

本稿では、円墳の規模とその意義が、古墳時代前・中・後期と三期区分にそう形で、変化しているという結果を得た。

すなわち前期には、北陸各地において、前方後円・前方後方墳が築かれる一方で、若干数の大・中型円墳が併行して築かれた。それに対して中期には、前方後円墳が築かれる地域（若狭・越前・加賀）と、大・中型円墳が盛行する地域（能登・越中）とに分かれるようになってきた。後期には前方後円墳が衰退するとともに、大・中・小型円墳が主流となる。このように同規模の円墳の被葬者の位置づけも、時期と地域によって異なるであろう。

おそらくは社会的地位の表現において、前期は前方後円・前方後方墳の規模の差が重要であり、中期を転機として後期には円墳の規模の差をより重視するようになってきたものと推察したい。その結果、墳墓に身分の上下を表わす階層が飛躍的に増加している。これを大化革新令にみるような古代の墓制に至る一つの過程と考えることも可能であろう。

最後に富山県立山町稚兒塚古墳と同塚越古墳について取り返してみたい。これらは未調査であるが、中期のものと推測することが許されるならば、古墳時代前期から中期へかけての大きな政治的变化を反映している可能性が高い。

先に示したように古墳時代前期には越中西部において相当数の前方後円・前方後方墳が築かれる。それに対して中期には円墳が主流となり、かつ越中最大の円墳である稚兒塚古墳と第2

位の塚越古墳が越中東部に位置することになる。これら2古墳の立地する常願寺川扇状地扇端部は、弥生中期以後、開発が進んでいたところであり、その変化の背景はおそらくは政治的なものであったろう。

古墳時代中期の政治体制について、都出比呂志氏は、小野山節氏の古墳規制論をふまえつつ、ある首長は抑えて帆立貝式古墳や円墳を築かせ、特定の首長にてこ入れして前方後円墳の築造を許す方式があったことを示している。^⑨私達が測量調査を実施した2古墳は、このような政策が、北陸東部にまで及んでいたことを示していると考えたい。またこの新たに円墳を営むようになった地方の中においても、政治構造の変化があった可能性が高く、これらの円墳に示される施策が次の群集墳を生む母胎となった可能性のあることを指摘して、今後の調査の進展を待ちたい。

[注]

- ① 石川考古学研究会「鳥屋・高階古墳群分布調査報告—石川県主要古墳群分布調査報告第1年度—」『石川考古学研究会会誌』第20号、1977年。
- ② 石川考古学研究会「江沼古墳群分布調査報告—石川県主要古墳群分布調査報告第2年度—」『石川考古学研究会会誌』第21号、1978年。
- ③ 石川考古学研究会「北加賀地域古墳群分布調査報告—石川県主要古墳群分布調査報告第3年度—」『石川考古学研究会会誌』第22号、1979年。
- ④ 石川考古学研究会「能登散田金谷古墳」1978年。
- ⑤ 石川県立埋蔵文化財センター「県内遺跡群詳細分布調査報告書I(昭和54・55年度)」1984年。
- ⑥ 石川県立埋蔵文化財センター「県内遺跡群詳細分布調査報告書II(昭和56・59年度)」1985年。
- ⑦ 石川県鹿西町教育委員会「雨の宮古墳群の調査(テンジクダイラ1号墳発掘調査報告)」1978年。
- ⑧ 宇ノ気町史編纂委員会編「石川県宇ノ気町史」1970年。
- ⑨ 大野市教育委員会「山ヶ鼻古墳群」大野市文化財調査報告第1番、1980年。
- ⑩ 小矢部教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団「小矢部市遺跡地図台帳」1985年。
- ⑪ 加賀市教育委員会「敷地平野山古墳群—詳細分布調査報告書—」加賀市埋蔵文化財調査報告第21集、1984年。
- ⑫ 鹿島町教育委員会「鹿島町の考古資料」「鹿島町史」資料編(続)上巻、1972年。
- ⑬ 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会「おまる塚古墳測量調査報告書・笠舞A遺跡分布調査略報」金沢市文化財紀要16、1978年。
- ⑭ 金沢大学考古学研究会「金沢大学考古学研究会活動報告第4号—能美地域の古墳群と梯川流域—」1986年。
- ⑮ 河村好光「滝古墳群」「石川考古学研究会会誌」第24号、1981年。
- ⑯ 唐川明史「鳥屋町北古墳群を中心とする分布調査報告」「石川考古学研究会会誌」第27号、1984年。
- ⑰ 唐川明史「石川県鹿西町内における古墳群分布調査報告—西馬場古墳群・森の宮古墳群・魔王山古墳群—」「石川考古学研究会会誌」第29号、1986年。
- ⑯ 小松市立博物館「埋れていた郷土の古代—最近の調査の成果—」1984年。
- ⑰ 斎藤優「足羽山の古墳」1960年。
- ⑱ 斎藤優他「福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群」福井県教育委員会、1966年。

- ② 斎藤優「越前鯖江 天神山古墳群」1973年。
- ③ 斎藤優「若狭上中町の古墳」1970年。
- ④ 鮎江市教育委員会「西山古墳群」1987年。
- ⑤ 志賀町教育委員会「志賀町の考古資料」「志賀町史」資料編第1巻別冊、1974年。
- ⑥ 珠洲市史編纂専門委員会「珠洲市史」第1巻資料編 自然・考古・古代、1976年。
- ⑦ 高岡市教育委員会「富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ」1986年。
- ⑧ 田舎浜町史編纂委員会編「田舎浜町史」1974年。
- ⑨ 立山町『立山町史』上巻、1977年。
- ⑩ 立山町教育委員会『立山町埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1988年。
- ⑪ 寺井町教育委員会『和田山・末寺山古墳群環境整備事業報告書』1983年。
- ⑫ 富山県『富山県史』考古編、1972年。
- ⑬ 富山大学人文学部考古学研究室「関野古墳群」富山大学考古学研究報告第1冊、1987年。
- ⑭ 中司照世「古墳時代」「國況 発掘が語る日本史」第3巻 東海・北陸編、1986年。
- ⑮ 七尾市史編纂委員会編「七尾市史」1974年。
- ⑯ 西井龍儀「若宮古墳とその周辺の遺跡について」「かんとりい」No7、1983年。
- ⑰ 羽咋市史編纂委員会編「羽咋市史」原始・古代編、1973年。
- ⑲ 横木澄夫「石川県押水町森本大塚古墳の予備調査—葺石と埴輪を有する墳丘装飾の一例—」「石川考古学研究会会誌」第10号、1966年。
- ⑳ 福井県『福井県史』資料編13考古、1986年。
- ㉑ 福井県教育委員会『文化財調査報告第17集』1967年。
- ㉒ 福井県教育委員会『太田山古墳群』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第8集、1976年。
- ㉓ 福井県教育委員会・古代学協会『福井市宿布古墳群』1985年。
- ㉔ 福井考古学会『福井考古学会会報』第9号、1985年。
- ㉕ 福井市教育委員会『中山2号墳・三十八社3号墳』1987年。
- ㉖ 藤田富士夫『富山』日本の古代遺跡13、1983年。
- ㉗ 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図—石川県—』1976年。
- ㉘ 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図—富山県—』1974年。
- ㉙ 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図—福井県—』1980年。
- ㉚ 松岡古墳群を守る会『松岡古墳群の埴輪』1982年。
- ㉛ 松岡町教育委員会『改訂 松岡古墳群』1979年。
- ㉜ 谷内尾晋司「輪島市金屋谷四ツ塚古墳群」「石川考古学研究会会誌」第16号、1973年。
- ㉝ 吉岡康暢「金沢市小坂1号墳の調査」「石川考古学研究会会誌」第13号、1970年。
- ㉞ 輪島市史編纂委員会『輪島市史』資料編第3巻、1974年。
- ㉟ 小野山節「五世紀における古墳の規制」「考古学研究」第63巻第3号、1970年。
- ㉟ 小矢都市教育委員会・小矢都市埋蔵文化財分布調査団「小矢都市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ」小矢都市埋蔵文化財調査報告書第12冊、1983年。
- ㉞ 小矢都市教育委員会・小矢都市古墳発掘調査団「若宮古墳」小矢都市埋蔵文化財調査報告書第18冊、1986年。
- ㉞ 都出比呂志「古墳時代」「向日市史」上巻、京都府向日市、1983年。
- ㉞ 富山大学人文学部考古学研究室「谷内16号古墳」富山大学考古学研究報告第2冊、1988年。

第4章 東大寺領大荊莊をめぐって

宇野 隆夫

北陸における著名な初期荘園の一つとして、富山県中新川郡立山町泉・寺田・若宮付近に比定される東大寺領大荊莊がある。これについては従来、文献・絵図・歴史地理の方法によって多くの研究が積み重ねられてきている。この成果に加えて、1988年度に当地区の遺跡分布調査を実施した結果、いくつかの興味深い事柄が判明してきた。これらのことと踏まえて、大荊莊及びそれがもつ歴史的意義について、現在、知りえる限りのことを整理しておきたい。

1 研究史 (第14~16図)

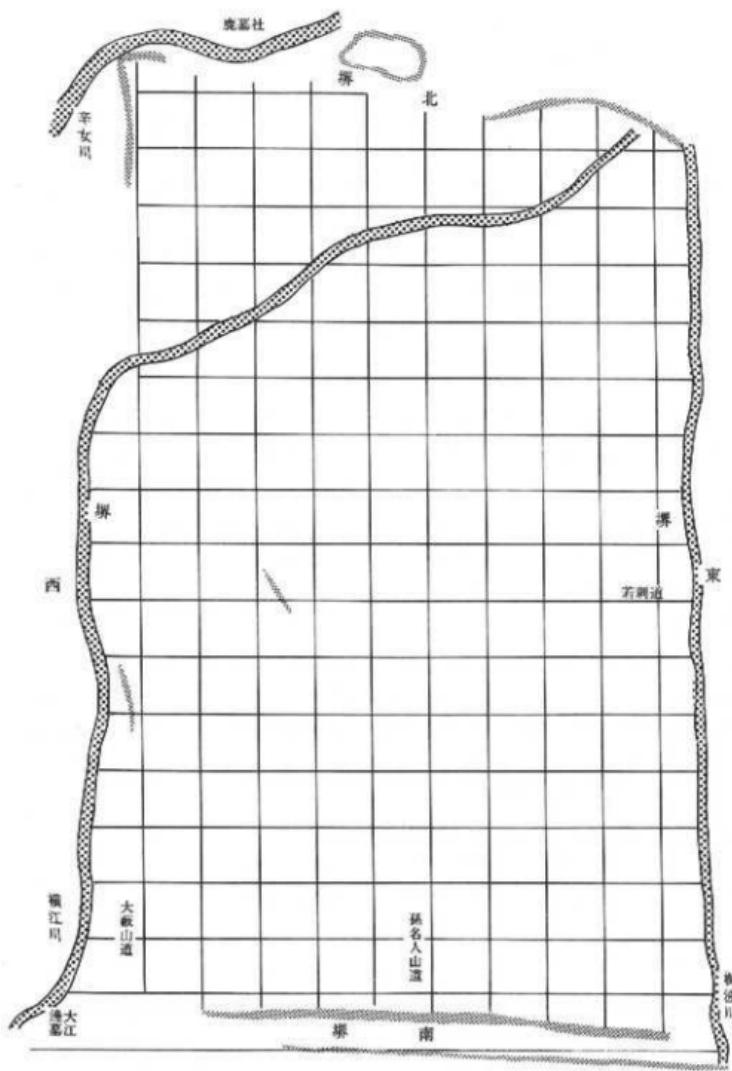
大荊莊に関する最も重要な資料は、東大寺正倉院に伝わる越中国新川郡大藪開田地図（天平宝字3年（759））と越中国新川郡大荊村墾田并野地図（神護景雲元年（767））である。

大藪開田地図には、条里の条数の記入はないが、条里の方眼を記す（第14図）。また西南端には大江辺墓、北に鹿墓社があり、東は梶波川が北流し、西は横江川が北流した後に東北流して荘域を横ぎることを示している。石原与作氏は、大江辺墓を富山県下最大の円墳である立山町浦田稚兒塚古墳にあて、その荘域を復原した（第14図）。また鹿墓社の旧社地も推定地北に隣接したという。

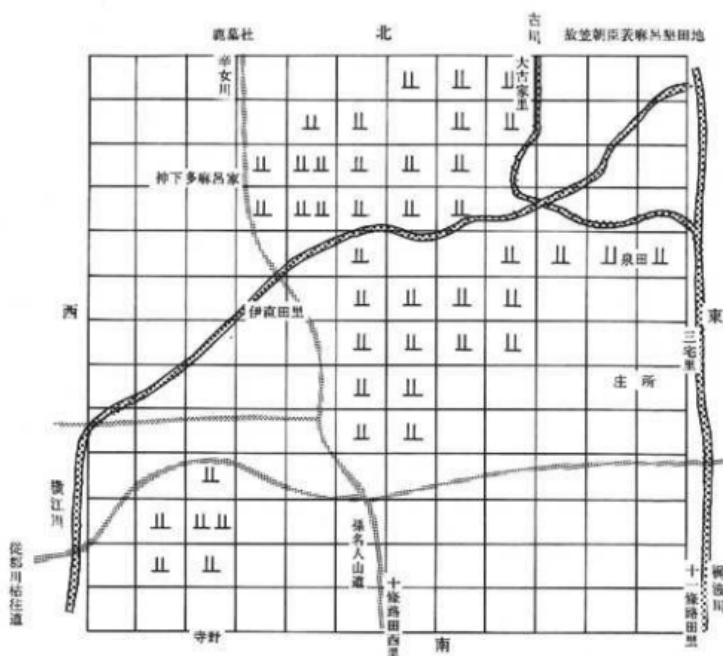
大荊村墾田并野地図では、10条・11条の条数を記し、11条1行6・2行6の2町歩の区画に荘家（庄所）のあることを示している（第15図）。また荘域の西北には、在地の土豪と推定される神下多麻呂家があり、南北に孫名人山道が、東西に從都川枯往道がのびている。南北の道は山に通じる道であり、東西の道は都街と川枯郷を結ぶ道であるという。なお石原与作氏は、東大寺領丈部花園から、都街は上市町正印に、川枯郷は立山町利田横枕遺跡に比定した。また山については不明であるが、南約9kmの立山町上末窯付近を想像したいところである。このように当地区は、横江川と梶波川の水運ばかりでなく、陸路も十字に交差する交通の要地であった。なお南北の里数については、里外の地であり、南3里に及ぶという。

この大荊莊の荘域は、150町歩であり、神護景雲元年（767）の時点では、19町1反60歩が開田され、130町8反300歩が未開野地であると記されている。

越中には、東大寺領荘園約4,200町歩の約四分の一が所在し、大きな位置を占めていたが、周知のように長徳4年（998）には、「右件の郡々田は荒廃數多にして、熟田幾くならず」と記され（「諸国庄家田地目録」「平安遺文」卷2）、寛弘2年（1005）には東大寺勘納使が21年分の未納地子物を取り立てている。このように東大寺の初期荘園經營は大きくゆらぐが、東大寺



第14図 越中国新川郡大藏開田地図（天平宝字3年（759），正倉院蔵）

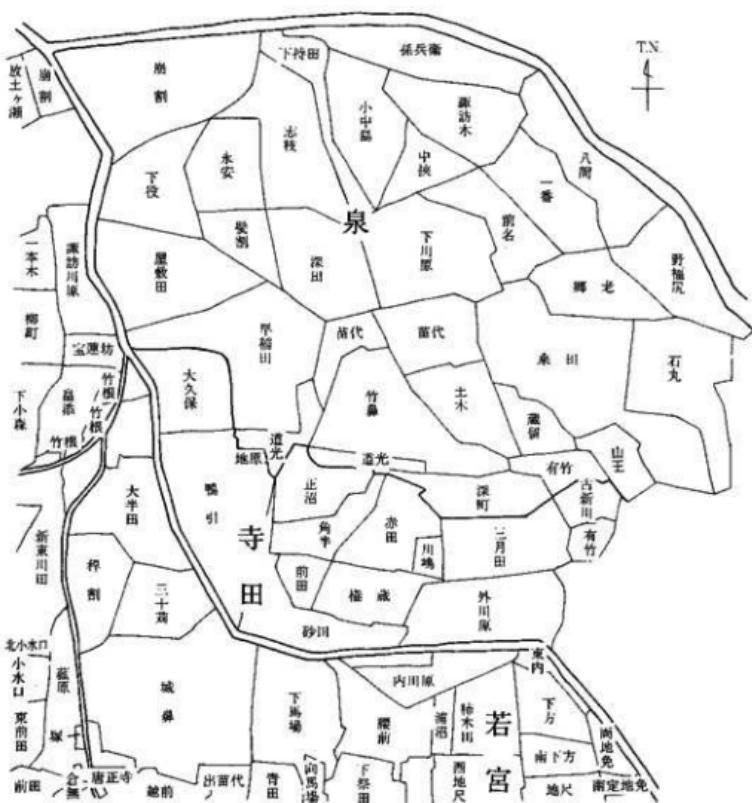


第15図 越中国新川郡大荆村墨田井野地図（神護景雲元年（767）、正倉院蔵）

は以後も、その支配権を主張している。莊園絵図はそのための証拠書類であつたらしい。

なお現在の地割には、方割地割の痕跡をほとんど留めていない(第16図)。ただし泉村・寺田の位置は、大荆村塙田井野地図の泉田・寺野の位置とほぼ対応し、莊家比定地の蔵留に接して、乗田の小字名が残る。また莊城比定地西南隅には水口、東の境に古新川の小字名があり、かつての姿の痕跡と考えられる。

このような基礎的な研究に加えて、初期莊園がどのような体制下で開発されたのか、退転の実態はどのようなものであるのか、その歴史的役割をどのように評価するかなどについても、多くの研究がなされている。それらをここで網羅することはできないが、藤井一二氏の研究に従い、以下の点を列挙しておきたい。



第16図 大荆莊比定地付近の字名

- ① 東大寺の墾田所有は、造東大寺司の設置（天平20年（748）初出）と密接な関係があり、当初は北陸を中心とし、後に他地域にも広まった。
 - ② 墾田の獲得法には、勅施入、買得、豪族の施入の3種がある。勅施入が、本来の在り方であるが、経営のための諸物資の確保や、政治的な背景から、買得田と豪族の施入田が増加した。
 - ③ 荘園の開発・経営は、郡司・地方豪族および新興の勢力（あわせて富豪層）に、依拠するところが多かった。

- ④ 荘園内の耕田・口分田を耕作する農民には、遠隔の本貫地から出向くものと、莊園付近に進出した開墾型集落に住むものとがあった。また開墾型集落には、三世一身法や墾田永世私財法の施行を契機として成立したⅠ類と、東大寺莊園の成立を契機としてそれとの関わりで発展したⅡ類がある。

⑤ 初期莊園が9世紀中頃から10世紀にかけて衰退していく主因は、郡司より下位の村落首長を中心とする勢力が、自ら「所」を構成し、莊地を侵略したり、耕作を忌避するようになったからと考えられる。

2 遺跡分布調査の成果（第17・18図、第2表）

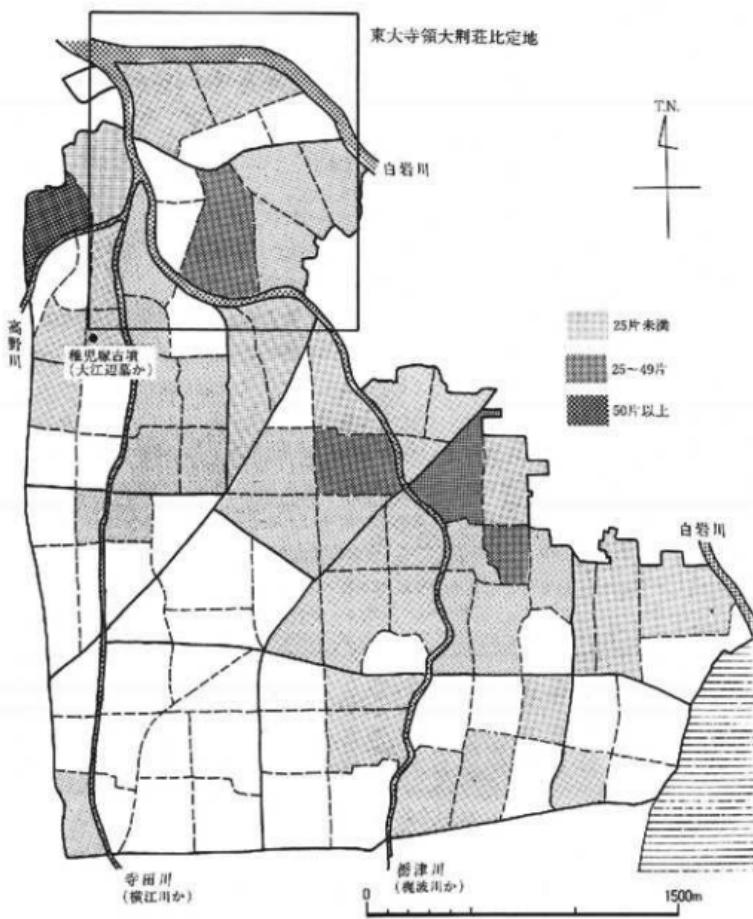
大荆荘比定地を含む常願寺川複合扇状地の扇端湧水地帯には、広くほぼまなく古代の遺物が散布する(第17図・第2表)。この中に、散布が集中する地点が3個所あり、西から浦田遺跡、大荆荘比定地、辻地区の遺跡である(利田櫛橋遺跡は昨年度調査地区)。

採集した古代遺物には7世紀に比定できるもののがなく、8世紀前半の資料は若干量が存在する。その八世紀前半代の遺物を採集できる地点が上記の3個所に一致することは興味深い。そして散布する遺物の大多数は8世紀後半～9世紀のものであり、以後は減少していく。ただし、全く遺物が散布しなくなるわけではなく、分散的に若干量が散布する。

大荆荘比定地において設定した遺跡は、泉藏留遺跡、泉下役遺跡、寺田川嶋遺跡、寺田正沼遺跡、寺田三十荘遺跡、寺田越前遺跡である(第18図)。これらのうち泉下役遺跡が、古代以後に成立したものであるのに対して、他の5遺跡は、断絶はあるものの、縄文なし弥生時代以後、長く営まれている。その一つの理由として、後者の遺跡が旧河道に挟まれた微高地という、比較的安定した場所に立地することをあげうるであろう。ただし古代以前の散布量は少ない。

第2表 各遺跡の時代別遺物散布量（ゴチャクが大荆莊比定地の遺跡、遺物破片数）

遺跡名	泉藏	寺田下	寺田上	寺田正沼	寺田越前	利根川枕	浦	浦田前田	浦田柳町	若林大九	若林B	若林A	若林	辻	辻	辻	辻	高原下	高原上	高 原門	高 原塚	高原草
繩文																						
弥生～古墳	5	4	6	3	7	6	34	24	1	2		4	3	79	19	7	7	15	8	5		
古代	24	1	10	31	2	4	72	52	7	2	2	1	10	1	35	37	60	33	31	4	5	
中世	12	2	3	21	2	10	12	11	58	4	2	5	18	16	30	15	49	29	7	11	1	
近世	11	12	6	29	2	19	8	9	26	3	2	3	16	9	21	32	38	61	39	17	105	10



第17図 古代遺物の散布状態と東大寺領大荆莊比定地



第18図 大荆莊比定地付近の古代遺跡

また大荊莊比定地に近接する遺跡として、浦田遺跡、浦田柳町遺跡、浦田前田遺跡、若宮A遺跡、若林階子田遺跡、若林大丸遺跡、辻遺跡、辻向田遺跡をはじめ、多数の遺跡を設定できた。これらの遺跡は、少なくとも8世紀末～9世紀にかけては並存し、当時の賑わいをうかがうことができる。

なお従来の調査によって、大荊莊比定地の南方約9kmに位置する立山町上末窯（須恵器窯）^{ウカイ}が8世紀後半～10世紀中頃と、大荊莊に一致する期間、操業していたこと及び、開発は扇端部にとどまらず、峡谷氾濫原や若干であるが扇央部にかけて及びつつあったことなどが判明している。

3 東大寺領大荊莊をめぐって

以上の分布調査の所見は、従来の見解と一致するところと、やや相違する点とがある。確實な考古学の所見は、発掘調査例の蓄積をまたなければならないが、現在の時点において考え得たことを示しておきたい。

(a) 荘域の比定について

大荊莊比定地において、遺物がほとんど散布しない帯状の地区を認めることができ、この地区は旧河道と推定できる（第17図）。現在の寺田川が、かつて荘域比定地西側から、この旧河道に沿って流れているとするならば、大藪開田地図の横江川と一致する（第14図）。また砺津川は現在、西北流するが、かつて北流したと考えるならば、同絵図の繩波川に合致する。このように旧河道を、絵図にあわせて解釈できる地点は、付近に存在しない。

遺跡の位置と、大荊村豊田井野地図とを対比するならば、遺跡は野地と記されている部分に位置することが判る（第15図）。また遺跡は、從郡川枯往道と孫名人山道という十字に交差する道に沿うと考えられる。そして同絵図において、庄所とされる地区が泉藏留遺跡に、神下多麻呂家と記す地区が泉下役遺跡に一致する。

このように、従来の荘域の比定と、遺跡分布調査による所見とはよく一致し、その比定はおそらく間違いないものと考える。

(b) 開発の契機について

常願寺川扇状地扇端部は、縄文・弥生時代以来、多数の遺跡が営まれたが、6世紀にはこれが減少し、確実に7世紀と認定できる資料は1点も採集できなかった。8世紀初めの頃、当地は、農業生産の潜在力に富むにもかかわらず、広大な野地（大荊）となっていたであろう。

8世紀前半になると、浦田遺跡、大荊莊比定地、辻遺跡と、3個所で小規模ながら、集落が営まれるようになったらしい。その開発の開始が、8世紀初頭であるか、同第Ⅱ四半期であるかについては、分布調査のみでは判定しにくいが、8世紀初頭に遡る資料もごくわずかであるが存在する。すなわちこれらの集落は、藤井一二氏が開墾型集落Ⅰ類とする、三世一身法・豊田永世私財法を契機として在地有力者が開発した村にあたるものであった可能性が高いもので

あるが、それ以前に若干の人の居住が始ったらしい。これらの集落は、以後と比べると著しく小規模なものであったろうが、初期莊園が当地に設定される背景を考えるには見逃せないものである。

大荆莊が設置される8世紀中頃以後、特に8世紀末～9世紀にかけて、当地域には常願寺川扇端遺跡群ともいべき、大遺跡群が形成された。その範囲は、大荆莊城よりも、はるかに広大であり、大荆莊150町歩を開墾するために集められたものとは考え難い。

当地区に初期莊園が置かれた意義は、むしろ莊域以外の開発が、おそらくは大荆莊と深くかかわりながら急速に進展したことにあると考えられる。この意味で、これらの集落は、藤井一二氏のいう開拓型集落Ⅱ類にあたるであろう。このことを可能としたものの一つは治水・用水網の整備というような技術の導入であったかもしれない。大荆莊に先行する3遺跡のうち、大荆莊は最も不安定な地に立地し、莊域が維持されること、当地域全体が維持されることにつながったであろう。

またこの頃、大荆莊と密接な関係をもちながら、立山町上末瀬が創業された。窯業を営むには、粘土の採掘と燃料の採取という権益が必要であり、從来は上市町の新川郡衙周辺においておこなわれていた。このことから東大寺領大荆莊は、手工業生産を管掌し、山野の用益権まで関与していた可能性が高いと考える。

このように東大寺領大荆莊の莊家は、莊域の開発と維持ばかりでなく、当地域の郡衙的な役割を負っていたように見える。東大寺には国家的機関という側面と、私的権門という側面があり、その評価は難しいところがあるが、8世紀中頃における窯場の移動という現象は、北陸において広くみることができ、國家体制の大きな転換のはしりが表されたものと考えたい。

このように当地域の開発は、8世紀前半と8世紀中頃の二つの契機を経て急速に進行した。

(c) 莊園絵図の理念と実像

絵図とは、客観的な地図ではなく、製作者の権利の主張を含む理念の表現とみてよいであろう。それに対して考古資料はその実態を反映し、私達はこの二者を対比することによって多くのことを知ることができる。

大荆村塙田井野地図をみると、庄所と神下多麻呂家があり、それぞれ泉藏留遺跡と、泉下役遺跡とにあたるらしい（第15・18図）。他方、寺田川鷲遺跡、寺田正沼遺跡、寺田三十石遺跡は絵図に記されず、寺野となっている。

神下多麻呂家にあたる地区は、莊域調査区の中でも、最も低湿な地区であり、大荆莊成立時にはじめて人が居住しはじめたところである。また遺物採集量も少ない。それに対して寺田地区の遺跡は微高地に立地し、縄文・弥生時代以来の遺物が若干量散布する。また寺田川鷲遺跡では8世紀前半の資料を採集している。

このように莊園絵図には、新しく劣悪な環境に住んだ人のみを記し、從来の集落は野地として扱っている。神護景雲元年（767）において莊域150町歩のうち、未塙野地は130町歩8反300歩

にのぼるというが、そのかなりは大蔵ではなく、在地の人々の集落およびその整田であったと推察される。荘園開発をはばむものは、財力や労働力の不足ではなく、立ちのき問題であったのかもしれない。同時に荘家に近接して、荘園内に集落が存続したことは、そこに住む人々が荘園経営において一定の役割を負っていたことを示すとも考えられる。

このように絵図においては、東大寺の一円支配が表現され、東大寺の荘園維持のこととなるが、その実態はかなり複雑なものがあったと推察できる。

(b) 大荆荘の衰退

9世紀中頃から10世紀にかけて、東大寺の荘園経営が難しくなってきたことが知られているが、当地域の遺物散布量も9世紀末頃から減少していく。そしてこの現象は、大荆荘比定地のみではなく、常願寺川扇端部全体で生じたことが重要と考える。

このことの最も簡単な解釈は、河川の氾濫等の理由で当地域一帯が衰退したというものであろう。ただし7世紀とは異なり、若干量の遺物が分散的に散布している。

先に絵図に現われない考古学的所見について示したが、逆に分布調査で遺跡と認定しなかった地区は水田であった。遺物散布量の多少によって設定した遺跡は、おもに集落であった可能性が高いことを認識しておかなければならない。そして集落に関する限り、集村であるならば判りやすいが、現在も付近に存続する散居村的景観の場合には、遺跡の設定が難しいであろう。

採集資料を見るならば、大荆荘の衰退期以後、中世にかけて、散布が分散化する傾向がある。おそらくは大荆荘を核とする集村的な体制に基づく開発を基盤として、小規模分散型の体制に転換していくのである。そして集落構造の転換は越中にとどまらずかなり広汎に生じたことと、初期荘園と郡街の衰退期がほぼ一致することから、この現象は社会そのものの大きな変化の表われであったとみなしたい。

結　び

以上のように、当地区においてはじめて考古学的な調査を実施した結果、東大寺領大荆荘の沿革と、当地域全体の動向についていくつかの知見を加えることができた。最後にこれらを簡単にまとめておこう。

- ① 大荆荘設置に先行して、常願寺川扇状地扇端部の3個所において、ごく小規模な開発が始まった。
- ② 大荆荘は上記3個所のうち、立地が最も不安定であった地区に設定された。
- ③ 大荆荘設置以後、常願寺川扇端部に大遺跡群が成立した。
- ④ 大荆村集田井野地図で、野地とされるところに集落が存在した。
- ⑤ 大荆村集田井野地図で、神下多麻呂家とされる地点は、新しく人が居住したした低湿などところであり、荘園経営において特に積極的な役割を果たした人物の居所と推定できる。
- ⑥ 9世紀末以後、荘園にとどまらず、常願寺川扇端一帯で遺物の散布量が減少するが、それ

は地域の衰退ではなく、集中型から分散型へという集落景観の変化を反映している可能性が高い。

なお⑥の現象について個人的な歴史観を示すならば、個人支配を原則とする律令国家から、土地支配を重視する王朝国家への転換の一つの表われであったと考える。集村形態は、構成員の掌握や軍事的な面では有利であるが、開発が一定水準に達して以後は、農業生産活動に不便を強いるものである。土地支配とそれにもとづく徵税を重視するならば、人々を集住させるよりも、より自由に開発と生産をおこなわせる方が合理的であったろう。逆にこのことは中世後期に再び集村化が進行することの意味を問うものである。

なお、初期莊園の開発の在り方は、勅施入と豪族施入というような個々の条件によって、多様な形態があったと推察できる。その比較検討は今後の課題であるが、9世紀を境として広く生じた大きな変化をつなぐものが初期莊園であったと考える。

〔注〕

- ① 石原与作「古代の莊園と条里」『立山町史』1977年A図をもとに第14図を作成した。
- ② 前掲注①石原論考。
- ③ 前掲注①石原論考のB図と下記論考から第15図を作成した。
藤井一二『初期莊園史の研究』1986年、図7。
藤井一二『国指定史跡「じょうべのま遺跡」と寺領莊園』『日本海地域史研究』第8編、1988年、図4。
- ④ 前掲注③藤井論考。
- ⑤ 前掲注①石原論考。
- ⑥ 藤井一二『初期莊園史の研究』1986年。
- ⑦ 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年。
- ⑧ 坂井秀弥『頸城平野古代・中世開発史の一考察』『新潟史学』18、1985年。
廣瀬和雄『中世への始動』『岩波講座日本考古学』第6巻 变化と画期、1986年。

第5章 おわりに

1988年度の分布調査によって2517片・口縁部31.0個体分の遺物を採集し、4個年の採集遺物は11566片・204.2個体分に達した。また遺跡数は30遺跡を加え、105遺跡となった。

本年度調査地区は、1987年度調査地区と同じく、常願寺川扇状地扇端部を中心とする地帯であり、採集品も相似した傾向をもつものであった。また本年度は、富山県下最大の円墳である立山町浦田稚児塚古墳の測量調査と、東大寺領大荘在比定地の分布調査を実施した結果、多くの知見を得ることができた。その成果については前章までにできる限りの考察を加えて示したが、最後にこれらを簡単にまとめておきたい。

本年度調査地区では從来10遺跡が知られていたが、分布調査の結果20遺跡を加え、30遺跡となった。また数が増したばかりでなく、それぞれの遺跡についても、長期にわたるものが多いことが判明してきた。そして遺跡の存続期間にはいくつかの型があり、遺跡の立地する地形と密接な関係をもつと推定できた。

扇状地扇端部における人の居住は縄文時代中期初めに本格化するが、この時期以後、近代に至るまで連続とされるものが第1型である。この型は高原地区という、扇端高位で上段段丘に隣接する地区に顕著である。この地区は、扇端の他の地区に比べ安全であると同時に、柄津川・白岩川という中規模河川が流れ、狩猟・採集民にとっても、農耕民にとっても、良好な居住地となつたのであろう。

第2型は、弥生時代にはじまり近代まで続くものである。浦田・泉・寺田・辻地区という、第1型より低位の扇端部微高地に立地する。この地区には縄文時代遺物は存在してもごく少量であり、弥生中期初め以後、特に後期後半以後に散布量が増加する。第2型の地区は稲作に特に適しているためか、弥生時代～中世においては、当地域で最も多くの遺物が散布する。

第3型は、古代以後、特に8世紀初め以後にはじまり、近代に至るものである。本年度調査区では北端アルカ内の低湿な地域であり、1986年度調査の峡谷氾濫原もこれに含まれる。遺物散布量は少ないが、開発の全体像を知る上で重要である。

第4型は、縄文時代遺物が散布して後、空白期間を経て再開発される遺跡である。扇状地のやや扇央寄りの地区と、中・上位の河岸段丘面に立地する。再開発の時期には古代・中世・近世の3種があるらしい。これらは初期の農業技術では稲作をおこないにくい地域であるが、面積は広大であり、どのように再開発が進行したかを明らかにすることには大きな意味がある。

他方、常願寺川扇状地扇端部にはほとんど遺物が散布しない時期のあることも判明してきた。その期間は、弥生前期、7世紀、16世紀である。これらは、それぞれ稲作の開始、初期莊園の成立、城館の築造という問題を考える上で興味深い知見となるものである。

以上のような成果をふまえて、今後の発掘調査の所見を増せば、立山町は地域開発史研究のモデル・ケースとなり得るであろう。

なお来年度は、扇央部の分布調査を実施する予定である。その多くは第4型と推定できるが、本年度調査地区の大祖里神社前遺跡・野町遺跡のように、高位に立地しながら存続期間の長い川沿いの遺跡もあり、慎重な調査を実施したい。

(宇野隆夫)



(1988年撮影、縮尺 1/20,000、第3・4図参照)



(1969年撮影。縮尺 1/20,000、第3・4図参照)

図版三 稚兒塚古墳航空写真（富山県公文書館提供）

(56)





1 墳丘（西から）



2 墳丘（北から）



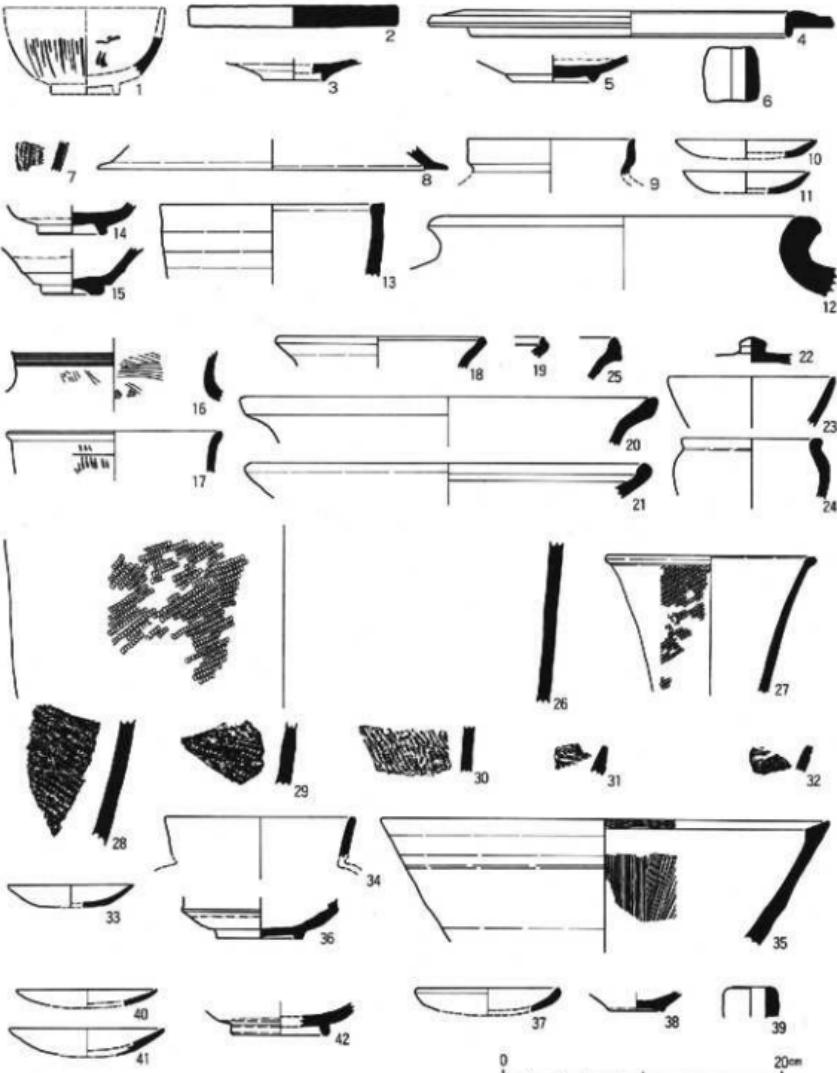
1 墳丘（東から）



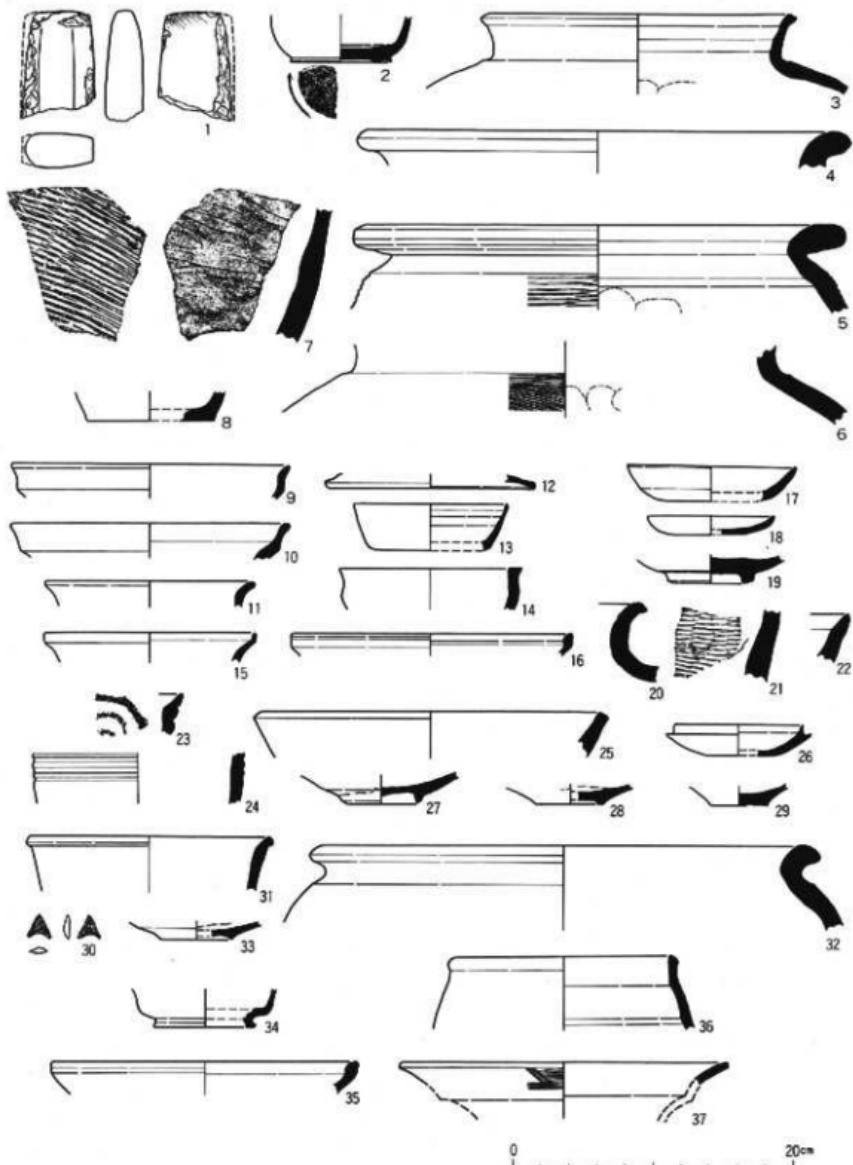
2 墳丘（南から）



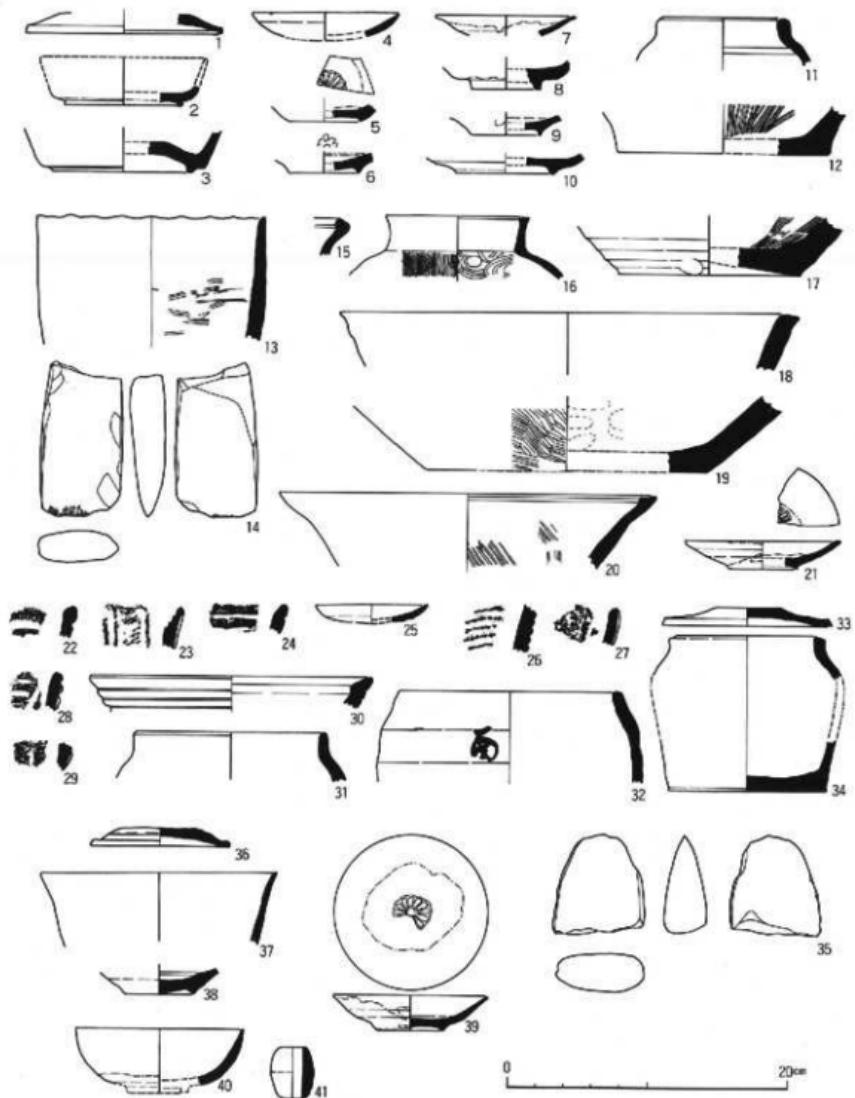
図版七 遺物実測図(1)



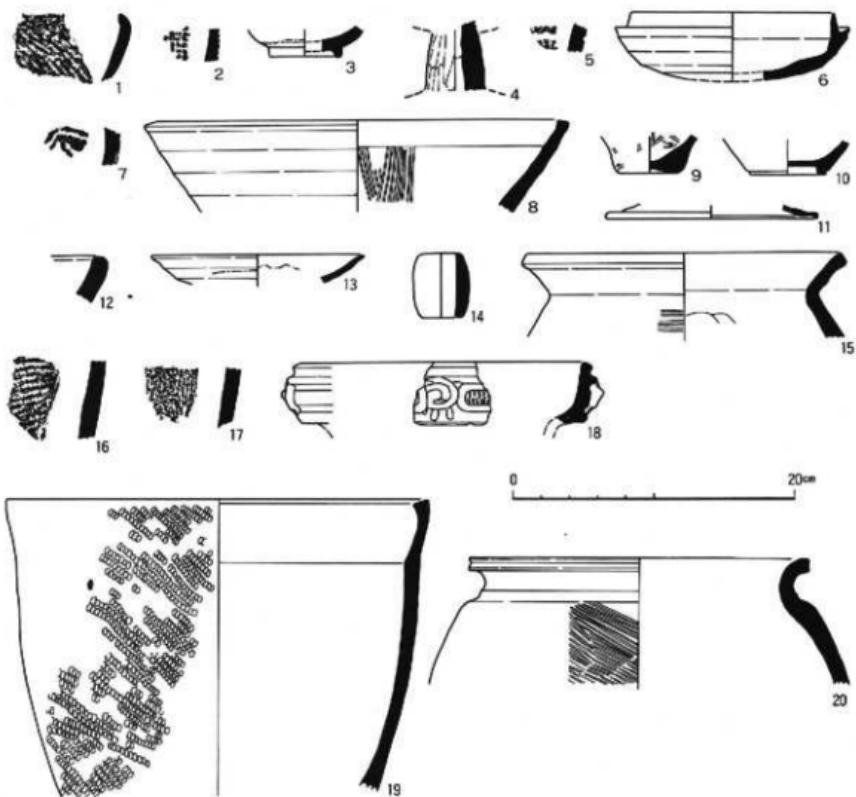
1～3：泉下役遺跡、4・5：泉藏留遺跡、6：寺田正沼遺跡、7～15：浦田前田遺跡、16～25：浦田遺跡、26～31：若林大丸遺跡、32：寺田三十苅遺跡、33：若林隣子田遺跡、34～36：寺田越前遺跡、37～41：若宮B遺跡、42：若宮A遺跡（縮尺1/4、図版11参照）



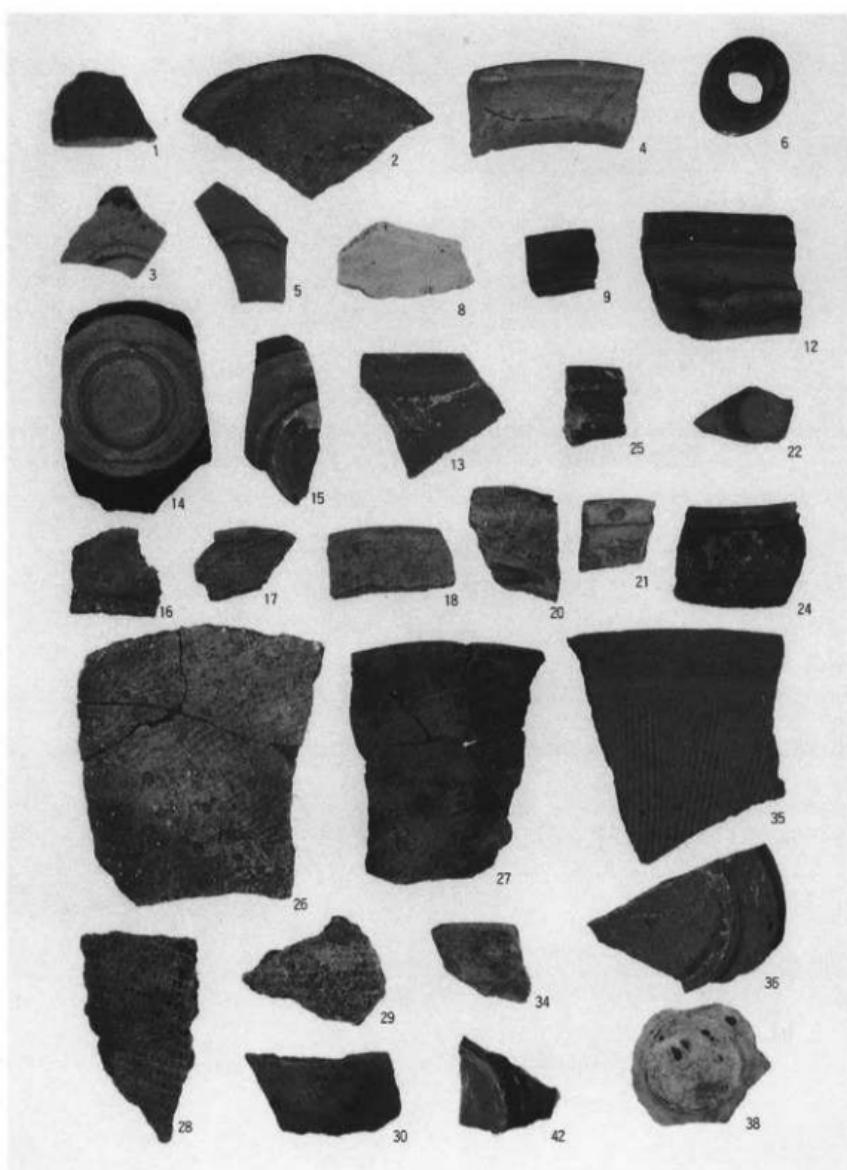
1~8:若宮遺跡林氏採集品, 9~22:让遺跡, 23~29:辻向田遺跡, 30~33:高原橋場遺跡, 34・
35:野口新鬼沢遺跡, 36:高原早稻田遺跡, 37:8ハ地区(縮尺1/4, 図版12参照)



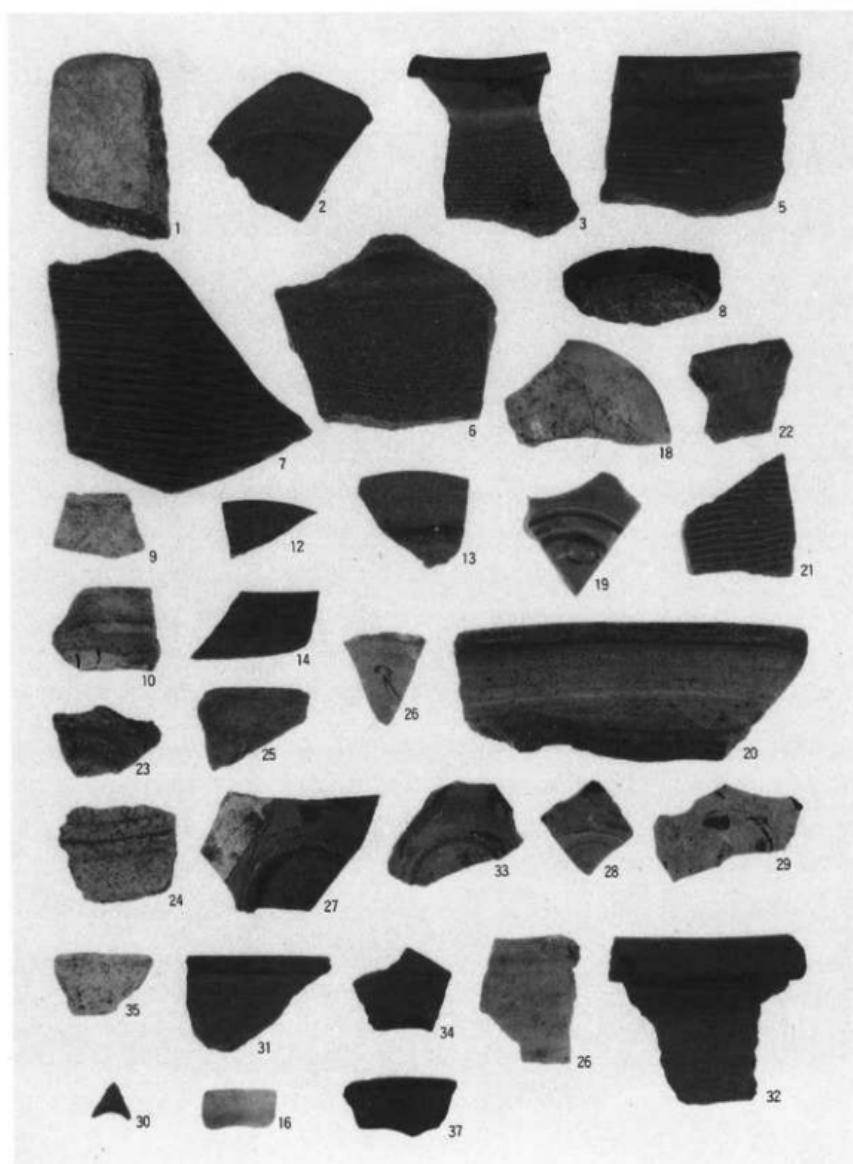
1~12:高原諏訪遺跡, 13~21:辻宮下遺跡, 22~25:高原大門遺跡, 26~35:高原念佛塚遺跡,
36~38:下女川新遺跡, 39:14-a地区, 40・41:14-b地区(縮尺1/4, 図版13参照)



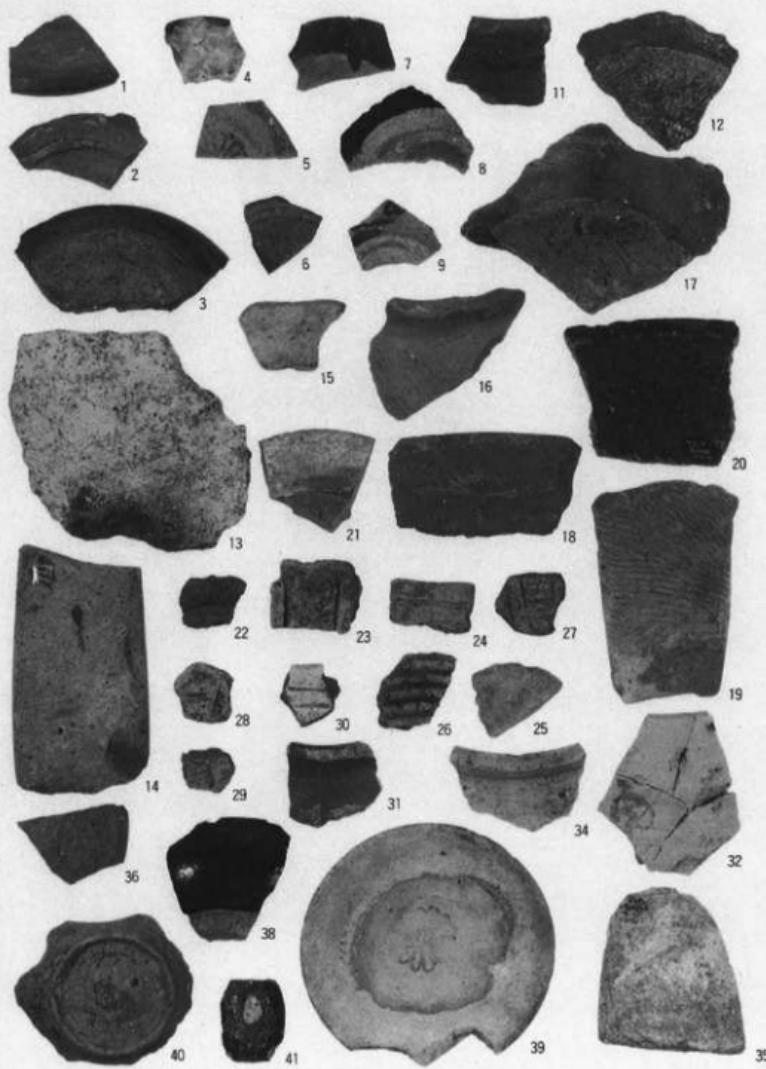
1～3：上女川新遺跡、4：野町遺跡、5・6：大祖里神社前遺跡、7・8：16二地区、9・10：稚見坂古墳周辺、11：17口地区、12・13：17～地区、14：18口地区、15：14才地区、16～18：地区外二ヶ塚付近、19：若林大丸遺跡追加資料、20：若宮B遺跡追加資料（縮尺1/4、図版14参照）



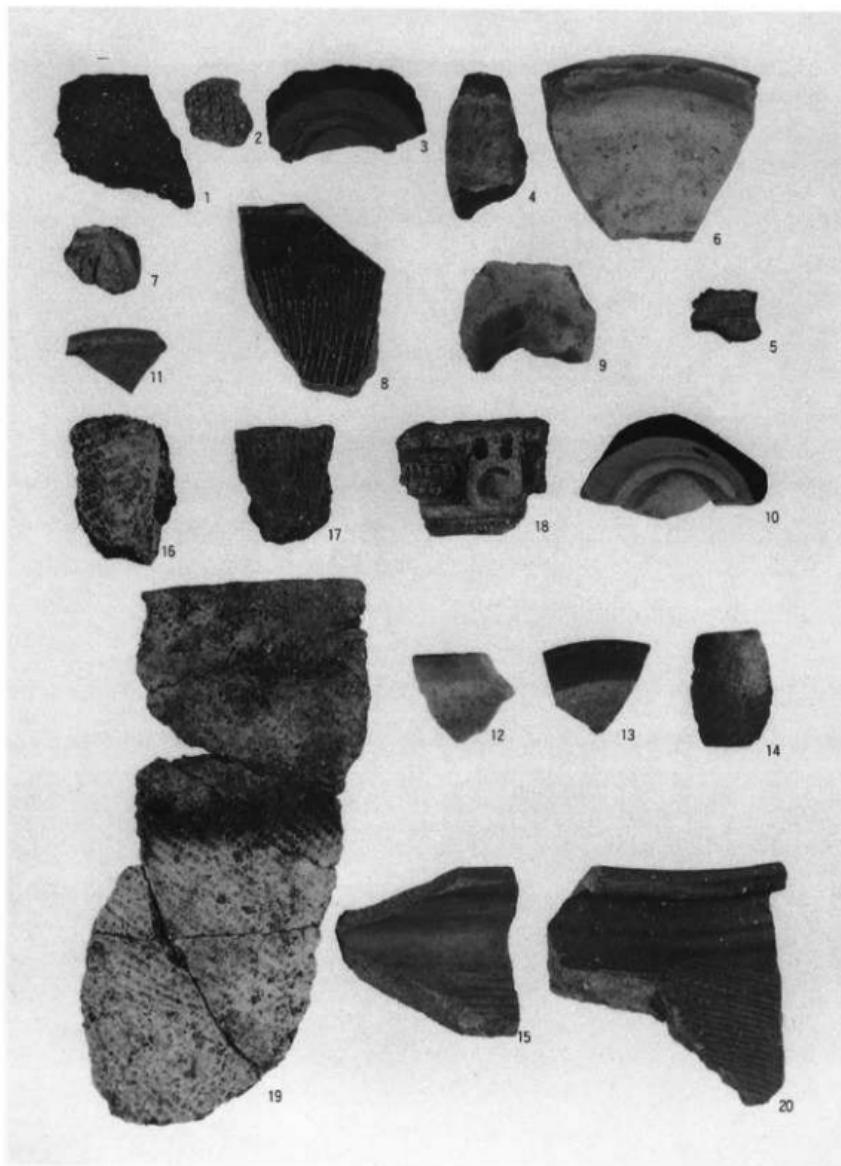
(図版7参照)



(図版8参照)



(図版9 参照)



(図版10参照)

- (1) 京畿留置跡（弥生時代～近世）
- (2) 寺田川嶋遺跡（縄文時代～近世）
- (3) 寺田正汎遺跡（弥生時代～近世）
- (4) 泉下役遺跡（古代～近世）
- (5) 浦田柳町遺跡（弥生時代～近世）
- (6) 大明神経塚（中世）
- (7) 浦田前田遺跡（縄文時代～近世）
- (8) 浦田後田遺跡（縄文時代～近世）
- (9) 離兄塚古墳（古墳時代）
- (10) 若林扇子山遺跡（縄文時代～近世）
- (11) 若林大丸遺跡（縄文時代～近世）
- (12) 寺田三十石遺跡（弥生時代～近世）
- (13) 寺田越前虎跡（弥生時代～近世）
- (14) 若林経塚（中世）
- (15) 若宮A遺跡（縄文時代～近世）
- (16) 若宮B遺跡（縄文時代～近世）
- (17) 辻遺跡（弥生時代～近世）
- (18) 辻宮下遺跡（縄文時代～近世）
- (19) 辻向田遺跡（縄文時代～近世）
- (20) 辻坂の上遺跡（縄文時代～近世）
- (21) 高原権場遺跡（縄文時代～近世）
- (22) 高原草船田遺跡（弥生時代～近世）
- (23) 高原済場遺跡（縄文時代～近世）
- (24) 高原忿佐坂遺跡（縄文時代～近世）
- (25) 高原下大門遺跡（縄文時代～近世）
- (26) 上女川新遺跡（縄文時代～近世）
- (27) 下女川新遺跡（縄文時代～近世）
- (28) 野町遺跡（縄文時代～近世）
- (29) 野口新鬼沢遺跡（縄文時代～近世）
- (30) 大祖黒神社前遺跡（縄文時代～近世）

(○: 縄文時代遺物採集地点, △: 弥生・古墳時代遺物採集地点, □: 古代遺物採集地点, ◇: 中世遺物採集地点, ●: 近世遺物採集地点)



1989年3月25日 印刷

1989年3月31日 発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

立山町埋蔵文化財調査報告書第8冊

編集発行 立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

印刷 ヨシダ印刷株式会社

